

—高知県高岡郡大野見村—

宮 野 々 遺 跡

発掘調査概要報告書

1997. 3

大野見村教育委員会

宮野々遺跡

発掘調査概要報告書

1997. 3

大野見村教育委員会

巻頭カラー



平成 7 年度調査 1 区 S T 1 完掘状況



同 遺物出土状況 (79)

序

平成4年度に高知県教育委員会によって実施されました遺跡分布調査で、本村では初めて、四万十川沿の宮野々（奈路）で弥生の遺跡が発見されました。また同時に、約1km上流の折野々（荒瀬）では縄文の遺跡が発見され、大野見の古代史が一気に書き替えられることになりました。

これまで、大野見に何時頃から人が住み始めたのか、それを証明する史料は全く無く、昭和31年に発行された大野見村史では「大野見古事録」の説として、用命天皇の頃（約1,400年前）とされていますが、弥生、更に古代の縄文の遺跡が発見されたことで、本村の歴史の空白が埋められ3,000年以前から先人の生活があったことが立証されました。

今回の発掘調査は、約2,000年前と推定される宮野々の遺跡を、平成5年度から3カ年かけて行われたもので、調査は高知県教育委員会文化財保護室の松田知彦先生のご指導をいただきました。調査の結果は予想以上の遺物が出土し、特に先人の生活の場である住居跡が確認されたことなど、大きな成果をあげることができました。

ここに、その調査をまとめ報告書を発行して多くの方々の参考に供することのできますことは誠に嬉しいことでございます。今後この報告書が広く活用され文化財への关心、認識が更に深まるることを期待するものでございます。

終りになりましたが、この調査にあたり、終始熱心にご指導いただきました松田先生、土地の所有者はじめ直接発掘作業にご尽力いただきました多くの皆様に深甚なる感謝を申し上げ報告書発行のご挨拶とします。

平成9年3月

大野見村教育委員会

教育長　岡　村　恒　政

例　　言

1. 本書は、大野見村が文化庁の国庫補助を受け平成6・7年度に実施した宮野々遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、高知県教育委員会並びに高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと大野見村教育委員会が調査主体となり実施した。期間は、平成6年10月31日～12月2日及び平成7年11月6日～12月26日である。整理作業は、国庫補助を受け平成8年度に実施した。
3. 発掘調査体制は、以下の通りである。
 - 調査員
松田知彦（高知県教育委員会文化財保護室　社会教育主事）
 - 事務担当
平成6・7年度　下元耕三（大野見村教育委員会社会教育係長）
平成8年度　　田上益伊（　　同　　）
 - 調査協力
門脇　隆（高知県教育委員会文化財保護室　社会教育主事）
寺川　嗣（　　同　　社会教育主事）
4. 本書の執筆・編集等は松田知彦が行った。
5. 遺物整理・図面作成等の作業においては、井上博恵・松木富子・小松経子氏の協力を得た。
6. 本報告書作成にあたっては、出原恵三・山崎正明・松村信博・久家隆芳氏をはじめ(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター諸学兄から貴重な助言、教示を得た。記して深く感謝の意を表したい。
7. 出土遺物は、平成6年度出土分「94-210M」、平成7年度出土分「95-230M」と注記し、大野見村教育委員会において保管している。
8. 発掘作業においては、地元官野々地区を中心とする下記の方々の協力を得ることができた。記して深く感謝の意を表したい。

吉岡　泉	吉岡　学司	南部　勝一	古谷　亘	南部　益美
小笠原　市代	南部　蛙瀬水	川上　鶴子		

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 宮野々遺跡の位置と環境	3
第Ⅲ章 調査区の概要及び調査方法	5
1 調査区の概要	5
2 調査方法	5
第Ⅳ章 平成6年度調査	
1 1区Aの遺構と遺物	10
2 1区Bの遺構と遺物	13
3 1区Cの遺構と遺物	16
4 2区の遺構と遺物	19
第Ⅴ章 平成7年度調査	
1 1区の遺構と遺物	30
2 2区の遺構と遺物	43
第VI章 まとめ	50

挿図目次

Fig. 1	大野見村位置図	1
Fig. 2	宮野々遺跡の位置と周辺の遺跡	2
Fig. 3	発掘調査区位置図	4
Fig. 4	平成 6 年度検出遺構全体図	9
Fig. 5	1 区 A 全体図	11
Fig. 6	1 区 A・1 区 B 出土遺物	12
Fig. 7	1 区 B 全体図	14
Fig. 8	1 区 B・1 区 C 積穴住居址状遺構出土遺物	15
Fig. 9	1 区 C 積穴住居址状遺構	17
Fig. 10	1 区 C 積穴住居址状遺構及び 2 区 SX 1 出土遺物	18
Fig. 11	2 区 SX 1	21
Fig. 12	2 区 SK 1 ~ 8	22
Fig. 13	2 区 SK 1・2・5・7、P 2 及び包含層出土遺物	24
Fig. 14	2 区 P 1 ~ 4、2 区 包含層出土遺物	25
Fig. 15	平成 7 年度検出遺構全体図	29
Fig. 16	1 区 ST 1	32
Fig. 17	1 区 ST 1 出土遺物	33
Fig. 18	1 区 ST 1 出土遺物	34
Fig. 19	1 区 ST 1 出土遺物 (117・141 を除く)	35
Fig. 20	1 区 SX 1	37
Fig. 21	1 区 SX 2、SK 1	40
Fig. 22	1 区 SK 2 ~ 8、P 1	41
Fig. 23	1 区 SX 1・2 及び検出面出土遺物	42
Fig. 24	2 区 SK 1	44
Fig. 25	2 区 SK 1 出土遺物	45
Fig. 26	2 区 SK 1 出土遺物	46
Fig. 27	2 区 SK 2 ~ 6、P 1 ~ 2	48
Fig. 28	2 区 SK 1・2・6 出土遺物	49

写真図版目次

平成6年度写真図版

P L 1	宮野々地区集落・調査前全景	55
P L 2	1区C堅穴住居址状遺構完掘状況・2区S X 1完掘状況	56
P L 3	2区S K 4完掘状況・遺物出土状況	57
P L 4	出土遺物	58
P L 5	出土遺物	59
P L 6	出土遺物	60
P L 7	出土遺物	61
P L 8	出土遺物	62

平成7年度写真図版

P L 9	1区S T 1完掘状況・1区S X 1完掘状況	65
P L 10	1区S X 2完掘状況・1区完掘状況	66
P L 11	2区S K 1遺物出土及び完掘状況	67
P L 12	2区完掘状況・調査地付近の四万十川	68
P L 13	1区S T 1中央 Pit 検出状況・1区S T 1遺物出土状況	69
P L 14	遺物出土状況	70
P L 15	出土遺物	71
P L 16	出土遺物	72
P L 17	出土遺物	73
P L 18	出土遺物	74
P L 19	出土遺物	75
P L 20	出土遺物	76

第Ⅰ章 調査に至る経緯

遺跡の所在する大野見村においては、中世以降の遺跡は確認されていたものの、中世以前においては歴史の空白期間として認識されていた。

高知県教育委員会では、昭和63年から10年計画で県下全域の遺跡詳細分布調査を実施していたが、平成4～5年度にかけて高岡郡下12市町村を対象に同調査が行われた。その際に、大野見村では6ヶ所の遺跡が新たに発見され、縄文時代と弥生時代各1ヶ所及び中世6ヶ所の遺跡の所在が明らかにされたのである。

それを受けて、大野見村教育委員会では将来の開発の可能性も考慮し、弥生～古墳時代の遺跡と考えられていた宮野々遺跡の確認調査を行うこととした。

平成5年度に大野見村の単独事業として小規模な試掘調査を実施したところ、弥生土器・石錘等の遺物及び焼土・土坑・ピット等の遺構が確認されたため、大野見村教育委員会と高知県教育委員会が協議のうえ、遺跡の所在範囲・性格等を把握し遺跡の保存・活用を図る目的で、国庫補助を受けて確認調査を実施するはこびとなった。

調査は、大野見村教育委員会が発掘主体となり、高知県教育委員会より調査員を派遣して実施した。平成6年度に第1次調査として遺跡の西半部を主として実施し、調査面積は約350m²、調査期間は平成6年10月31日～12月2日。平成7年度には地元理解の得られた東半部について第2次調査を実施し、調査面積は約750m²、調査期間は平成7年11月6日～12月26日である。



Fig. 1 大野見村位置図

高知県 高岡郡
大野見村全図



名 称	所 在 地	種別	現状	時代
1 宮野々遺跡	大野見村宮野々	散布地	田畠	弥生
2 中津川丸山城跡	萩中字ウワナロ	城館跡	宅地	中世
3 真珠庵跡	日ノ口	社寺跡	茶畠	中世
4 折野々遺跡	折野々	散布地	田畠	绳文
5 龍造寺跡	奈路	社寺跡	畠	中世
6 天佑寺跡	奈路字喜田	社寺跡	荒地	中世
7 大野見城跡	楨野々字古城山	城館跡	山林	中世
8 光願寺跡	吉野	社寺跡	山林	中世

Fig. 2 宮野々遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ章 宮野々遺跡の位置と環境

宮野々遺跡は、高岡郡大野見村字宮野々に所在する。大野見村は、高知市から西に約65kmの地、高南台地の東北部に位置している。東は中土佐町・須崎市に接し、西は東津野村・窪川町と境し、南は窪川町、北は葉山村と境している。役場の所在地（吉野）は、東経133度15分、北緯33度20分に位置し、海拔291.26mの高原の里である。総面積は100.35km²、そのおよそ97%は山林で占められ耕地は約320haの農山村である。

村の北は不入山系がそびえ、東に延びて千代の山山系が連なり、葉山・須崎との分水嶺をなしている。南には靈峰大小権現山を主峰とする山々、西は鈴ヶ森を主峰に船ヶ崎・陣ヶ森などがそびえ山岳地帯を形成している。これらの山並みを縫って、「日本最後の清流」と形容される四万十川が北から南に貫流している。川は村内の支流を合わせて延々192kmを流れ、中村市から土佐湾に注ぐ。地質的には、中生代ジュラ紀の安芸川層に属し、主に頁岩と砂岩、もしくはそれが互いに混じりあっている層からなっている。また、地層は断層及び褶曲が多く容易に真相を知ることは難しい。⁽¹⁾

遺跡所在地は、四万十川右岸の低位段丘上、大野見村役場の西南西約1.5kmに位置し、標高は290m前後、四万十川からの比高差約5mである。

当遺跡周辺には、遺跡数は多くはないものの、旧石器時代～繩文時代の遺跡が存在している。梼原町初瀬影野地遺跡ではチャート製のナイフ形石器や削器が検出されているが、併せて繩文前期初頭の土器・石器も検出されている。四万十川源流部近くの標高530mの地点に位置する東津野村船戸遺跡は、繩文早期の石器・土器が検出される。⁽²⁾また、平成6年に発掘調査が行われた同村北川遺跡では、繩文後期前葉の宿毛式から成立期の縁帶文土器及び縁帶文期に至る貴重な資料が出土している。⁽³⁾当大野見村においても折野々遺跡において繩文土器が表採されているが、詳細は不明である。

弥生時代になると、水系は異にするが、新庄川水系の葉山村永野遺跡において弥生前期末から中期前半の土器群が出土している。これらの土器群は、豊後水道両岸文化の土佐への流入ルートを知るうえで貴重なものである。また、大野見村に隣接した四万十川の下流窪川町においては、19本の銅鉢が出土しており、県下の銅鉢出土総数47本に比して特異な状況を呈している。銅鉢の出土地点のひとつ近隣には、弥生中期末から後期の土器などが発掘された神西遺跡が存在するが、住居址は発見されていない。なお、この地域では、銅鉢の他に銅戈も3本検出されている。古墳時代から古代にかけては、この地域から遺跡が突然姿を隠してしまう。前述のように数多くの青銅利器が検出されていることからしても、不思議な現象と言ふべきであろう。

そして、この地が再び歴史上に姿を現すのは、10世紀前半～中葉と推定されている津野氏の入国以降である。そして、16世紀に中村の一条氏と霸権を競った最前線基地である大野見城が、植野々の地に当時の姿をとどめている。

宮野々遺跡は、このような地域的発展の中で、四万十川中・上流域においての弥生時代小集落がいかに営まれたかという問題を提示してくれる遺跡として位置づけることができよう。



Fig. 3 発掘調査区位置図

第Ⅲ章 調査区の概要及び調査方法

1 調査区の概要

調査面積は、平成6年度350m²、平成7年度750m²である。調査対象地は現況水田及び花木の苗木生産地として利用されている。調査区全面は平坦であり、調査区内の比高差は少ない。周囲も主に水田として利用されており、その外側を南から西・北方向に四万十川が流下している。東側山すそには県道添いに宮野々の集落が営まれている。このあたりの四万十川は流れもゆるやかで、川岸はキャンプ場として整備されていることもあり、四季を通じて人々の憩いの場として利用されているところである。また、調査区からは北西に中世の歴史を物語る大野見城が、南東には窪川町との境である標高693mの大小権現山が眺望でき、発掘調査のロケーションとしては絶好の地であった。

2 調査方法

平成6年度・平成7年度共同様に行つた。まず、排土処理の都合上調査区を分割し、厚さ20~30cmの耕作土を重機で剥ぎ取った後人力で精査した。表土直下で遺構が認められたところについては人力により遺構の掘削を行い、最後に一部について下層確認のため重機で掘削した。遺構が肉眼で確認できなかった地点については、遺物の散布状況を見ながら人力で掘削した。なお、遺構については掘削後洗砂を入れ保護した後埋め戻した。また、一部の遺構については完掘せず保存したものもある。

遺構の実測及び遺物の取り上げについては、磁北にあわせて任意に測量杭を設け、東西方向にアルファベット、南北方向に数字を打ってグリッド番号とした。

第 IV 章

平成 6 年度調査

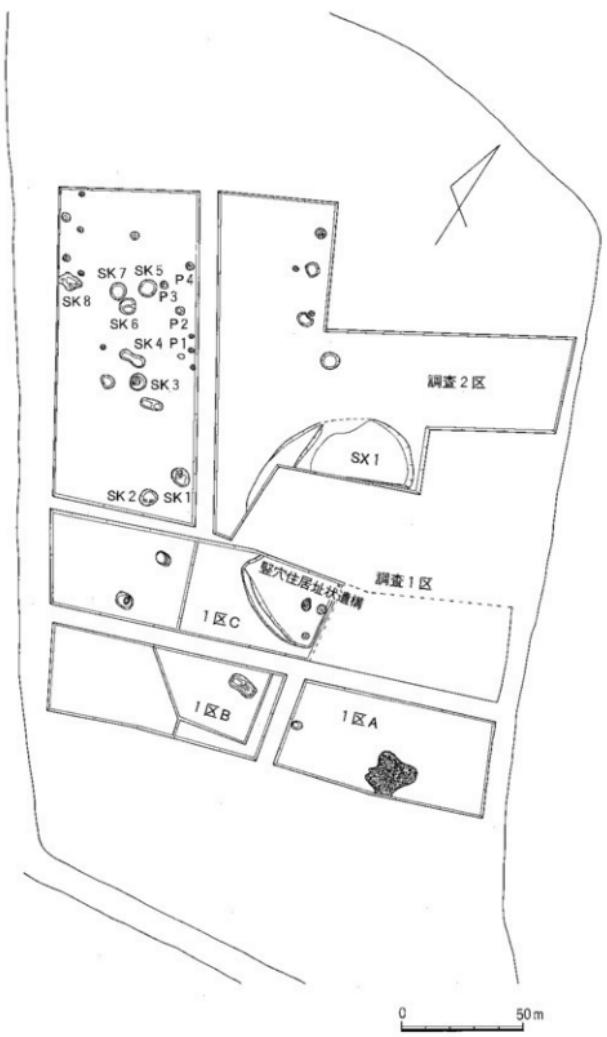


Fig. 4 平成6年度検出遺構全体図

1 1区Aの遺構と遺物

1区Aは、調査区南東に位置する約8m×4mのはば長方形の調査区である。表土直下では遺構が確認できなかったため、人力により包含層を掘り下げた。その結果、表土下約80cmで、炭化物の広がりと焼土を検出した。炭化物は、南壁に接して約3m四方に不整形に広がり、中央西より及び周辺部に焼土がブロック状に入る。周囲にピット等の遺構は確認できない。また、南壁セクションでも遺構の立ち上がりは確認できない。なお、調査区南西端に直径約50cmの土坑が確認されているが、出土遺物はなく時代は特定できない。

遺物は14点図示した。8は床面より出土しているが、他は包含層よりの出土である。1・2は鉢である。1は、押し潰した様な平底底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。外面は摩耗のため調整不明。内面口縁部は横ハケ、体部は左下がりのハケ調整。底部は指で押さえている。2は、しっかりした平底底部から斜上外方に立ち上がり、口縁部わずかに内湾する。口唇部は丸くおさめる。内外面とも摩耗しているが、内面は丁寧なナデ調整か。

3は粗雑な感のある小型の壺である。しっかりした平底底部から内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。頸部は粘土帯接合痕跡が顕著である。外面、口縁部から頸部にかけて荒い縦ハケ。内面、口縁部は荒い横ハケ、胴部は不定方向のハケ調整。内外面とも指頭圧痕が顕著である。

4～6は甕の口縁部である。4は、口縁部「く」の字状に外反し口唇部わずかに外傾する面をなす。頸部に粘土帯接合痕を認める。調整はハケ及びナデ調整。胎土中の砂粒小さく焼成は良好である。5は口縁部「く」の字状に強く外反する。口唇部は丸くおさめる。内外面ともハケ調整。6は、口縁部「く」の字状に外反し口唇部は外傾した面をなす。内外面ともハケ調整。外面には炭化物が付着している。甕は3点とも頸部は稜をなさない。

7の壺は、口縁部ラッパ状に強く外反する。口唇部は縦方向の面をなし、上端は指でつまみ上げ横にナデしている。内外面とも右下がりのハケ調整を施す。

8～14は底部である。8は、しっかりした平底から斜上外方に立ち上がる。外面ハケ、内面ナデ調整。9は、丸底風底部から斜上外方に立ち上がる。外面不定方向のハケ調整。内面は、ハケ目痕がわずかに残る。10は、丸底状底部から内湾気味に立ち上がる。外面縦及び右下がりのハケ調整。底部外面にもハケ目痕を確認できる。内面は指で押さえ。11は、しっかりした平底から斜上外方に立ち上がる。外面縦ハケ、底部外面にもハケ目痕あり。内面は指で押さえ。12は、尖底風底部から内湾気味に立ち上がる。外面右下がりのハケ調整、内面は摩耗している。13は、平底底部から斜上外方に立ち上がる。摩耗のため調整は不明である。14は、しっかりした平底底部から斜上外方に立ち上がる。摩耗が激しく調整は不明である。

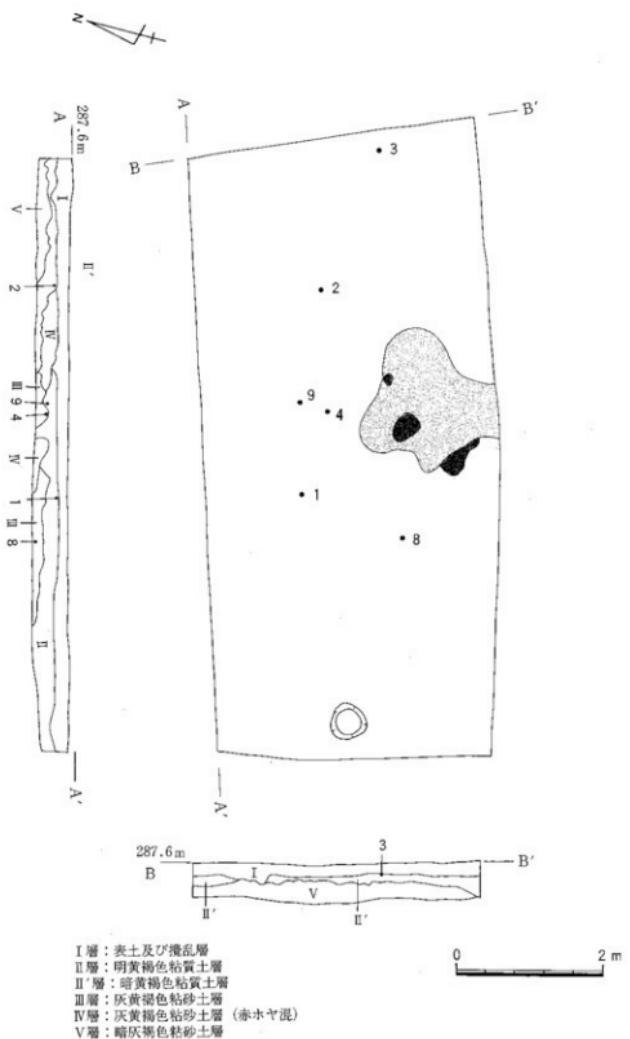


Fig. 5 1区A全体図

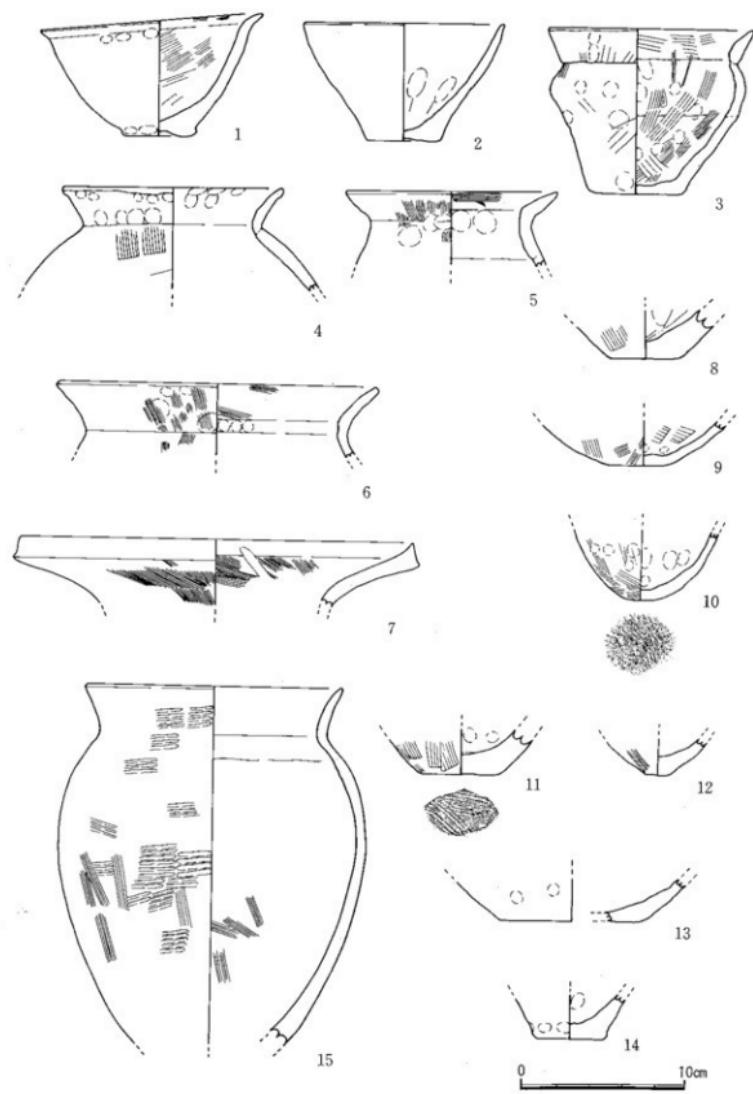


Fig. 6 1区A・1区B出土遺物

2 1区Bの遺構と遺物

調査区南端の、長軸9~10m、短軸3.5m内外の台形状の調査区である。遺構としては、北東端に土坑を1基確認したが、図示できる遺物はなく時代は特定できない。

遺物は、調査区西半に集中している。調査中は、竪穴住居址内ではとの思いがあったため、平面プラン及びセクションの確認に努めたが、肉眼では認識できなかった。図示した土器は15~29であり、上下約40cmの間に分散して入っている。

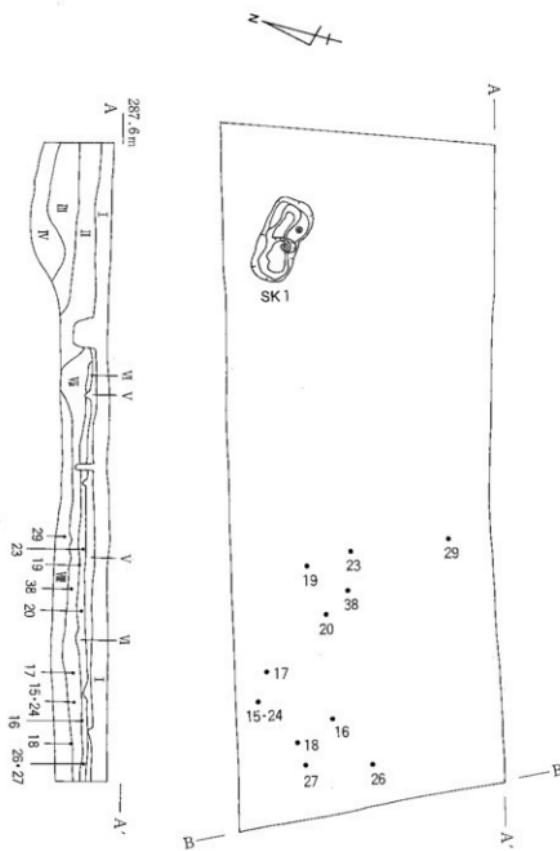
15は甕である。内湾する胴部から口縁部「く」の字状に緩やかに外反し、口唇部は丸くおさめる。やや長胴形の胴部を有すると思われ、最大径は上から約1/3の部位にある。外面は口縁部も含め叩いている。体部下半はタタキの後右下がりのハケ調整を施す。胴部中央全周にわたり煤が付着している。内面は、右下がりのハケ調整痕を認める。頭部内面は、稜をなさない。16は壺である。口縁部ラッパ状に外反し、端部に厚めの粘土帯を貼りつけている。粘土帯外周にハケ状工具で左下がりの刻み目状の紋様を施す。外面は左下がりの細かいハケ調整。内面は摩耗のため観察できない。17は小型の壺である。丸底風底部から内湾して立ち上がる。口縁部わずかに外反し口唇部は丸くおさめる。口縁部に、円形の穿孔を2ヶ所認める。外面丁寧なナデ調整。底部付近に黒斑を有する。内面は、底部付近のみ縦ハケ。胎土は粒子細かく焼成は良好である。最大径を胴部下半に有する。18は鉢である。尖底状底部から内湾気味に立ち上がる。摩耗のため、内外面とも調整観察不能。外面にわずかに炭化物が付着している。

19~21は甕の口縁部である。19は、口縁部に粘土帯を貼りつけ、わずかに外反する。口唇部は丸くおさめる。外面は摩耗し調整は不明である。内面は右下がりの荒いハケ調整。20は、口縁部「く」の字状に外反し、口唇部はわずかに外傾する面をなす。外面摩耗して観察不能。内面は、口縁部横ハケ。21は、「く」の字状に外反する口縁部に粘土帯を貼りつける。口唇部は外傾する面をなす。外面は指頭圧痕が顕著、内面は細かい横ハケ調整を施す。なお、19のみ頭部内面がわずかに稜をなす。

22~25は壺の口縁部である。22は口縁部ラッパ状に外反し、口唇部は外傾する面をなす。内面はハケ調整痕を確認できる。22の口縁部はラッパ状に強く外反し、端部は外方へわずかに垂れ下がる。口唇部は丸くおさめる。外面縦ハケ調整、内面は摩耗しており観察不能。24は口縁端部に粘土帯を貼りつけ肥厚させている。25は、口縁部ラッパ状に外反し口唇端部は丸くおさめている。

26は手捏ね土器である。特に内面に指頭圧痕が顕著である。

27~29は底部である。27は、丸底風底部から内湾気味に立ち上がる。摩耗が激しく調整は不明。28は、小さな平底底部から斜上外方に立ち上がる。外面縦ハケ調整。内面には炭化物の付着が顕著にみられる。29は丸底風底部から斜外方に立ち上がる。外面は摩耗している。内面にはわずかに右下がりのハケ調整痕が認められる。



I層：表土及び擾乱層
 II層：黄褐色粘質土層（地山層）
 III層：黄褐色砂質土層（地山層）
 IV層：砂層
 V層：灰黒褐色粘質土層
 VI層：明灰黃褐色粘質土層
 VII層：灰褐色粘質土層
 VIII層：暗灰黃褐色粘質土層

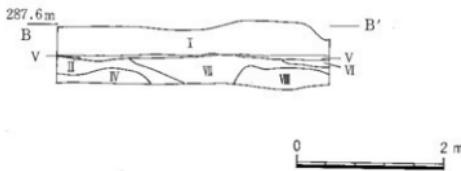


Fig. 7 1区B全体図

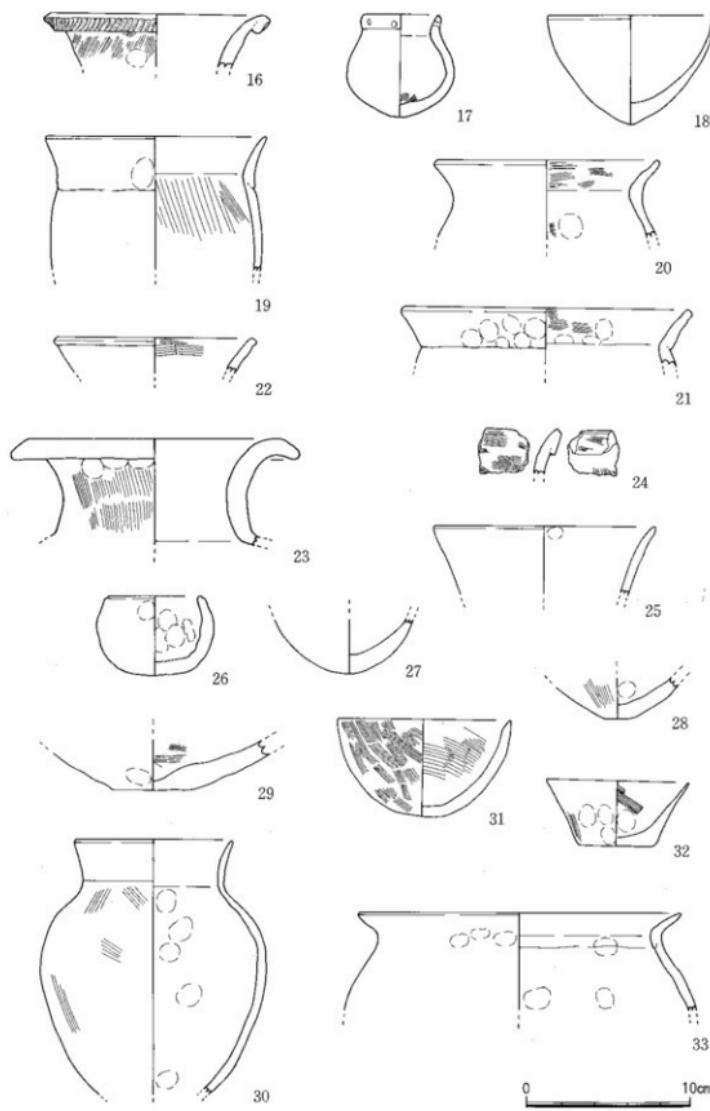


Fig. 8 1区B・1区C竪穴住居址状遺構出土遺物

3 1区Cの遺構と遺物

本調査区は、B区の北側に位置し、長軸約12m、短軸約4mの長方形の調査区である。ここからは、竪穴住居址状遺構を検出した。東側と北側は攪乱のため全容は不明であるが、円形の竪穴住居址を1/4に切り取った形状をしている。半径にあたる部分が約3~3.5m、検出面から床面までの深さが20cm内外と浅い。遺構の南壁には幅20cm内外で「ベッド状遺構」様の段が存在する。遺物もこの遺構の床面に張りついたような状態で出土している物がある。ピットは4基確認できる。柱痕を有する物がP2・P3であり。P1・P4については性格不明である。中央ピットに該当するような遺構は確認できない。また、炭化物や焼土等火を使用した痕跡は認められない。本遺構については竪穴住居址の可能性は残るもの、断定することには躊躇せざるを得ない。

遺物は、30~41を図示した。このうち、30~33及び35は床面又は床面直上から出土しており、34も上記遺構埋土からの出土である。36~41は調査区内包含層から検出している。

30は、最大径を胴部上半に有する壺である。内湾する胴部から口縁部ゆるく外反する。口唇部は丸くおさめる。外面は胴部にわずかにハケ調整痕を認める。内面は摩耗しており観察できない。31・32は完形の鉢である。31は丸底風底部から内湾気味に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。外面右下がりの細かいハケ調整を施す。体部には炭化物が付着している。内面上半は右下がりの螺旋状ハケ調整。32はしっかりした平底底部から斜上外方に立ち上がる。口唇部は指でつまみ上げ、横にナデている。外面わずかにハケ調整痕が残る。内面右下がりのハケ調整、底部付近は指頭圧痕が顕著で、爪痕を確認できる。また、内外面とも炭化物が付着している。

33・34は壺の口縁部である。33は、口縁部「く」の字状に強く外反する。口唇部は丸くおさめる。外面は摩耗しているが、炭化物が付着している。内面はナデ調整か。頸部に粘土帯接合痕跡を認める。34は、口縁部「く」の字状に外反し、頸部より上部は粘土帯を貼りつけている。口唇部は外傾する面をなす。外面細かいハケ調整を施し、全面に炭化物が付着している。内面は摩耗のため調整不明。

35は壺の底部であろう。しっかりした平底から斜上外方に立ち上がっている。なお、この35と31の鉢は、上むきにあたかも並べ置いたような状態で出土している。

36・37は共に壺の口縁部である。共に、口縁部ラッパ状に外反し、口唇部は外傾する面をなす。外面縦ハケ、内面横ハケ調整を施す。

38~40は、口縁部である。38は、外反する口縁部に粘土帯を貼りつけている。外面左下がりの細かいハケ調整、内面は横ハケ調整を施す。39は、外反する口縁部に粘土帯を貼りつけている。口唇部はしっかりした面をなす。口唇部外面横ハケ調整、口縁部外面は、ハケ状工具を右から左へ押し引きしている。内面は横ハケ及び指によるナデ調整。40は、口縁部上外方に開き、口唇部はわずかに外傾する面をなす。頸部に断面三角形の粘土帯を貼りつける。調整は、摩耗のため観察不能である。

41は、壺の底部であろう。しっかりした平底から斜上外方に立ち上がる。外面縦及び右下がりのハケ、内面縦ハケ調整を施す。

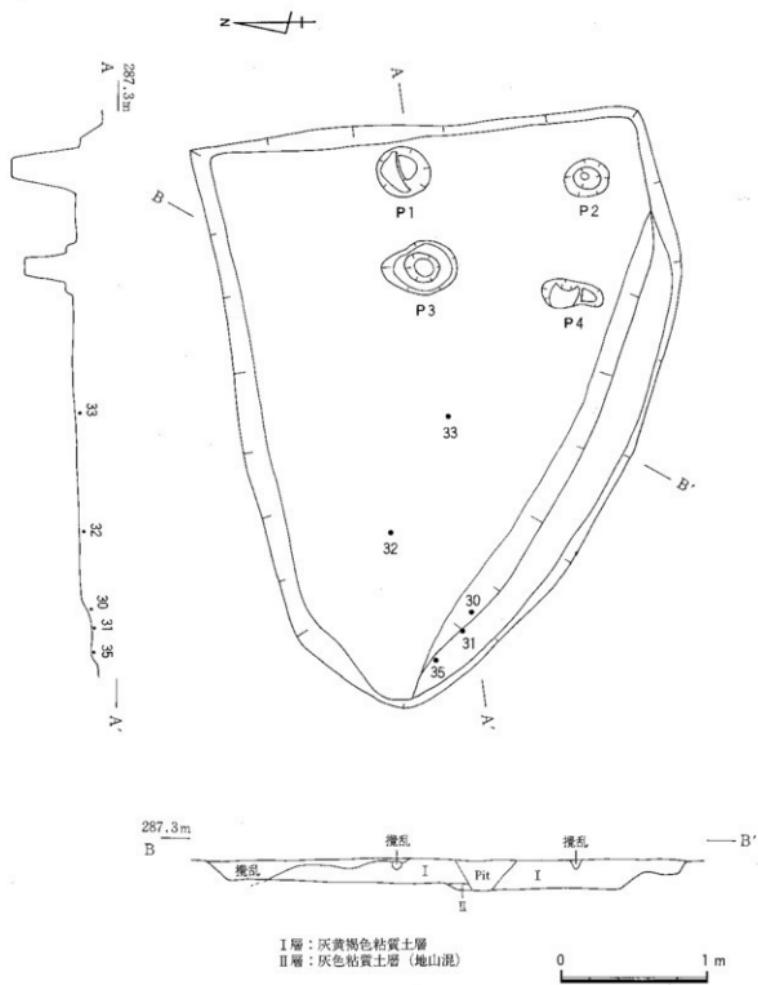


Fig. 9 1区C堅穴住居址状遺構

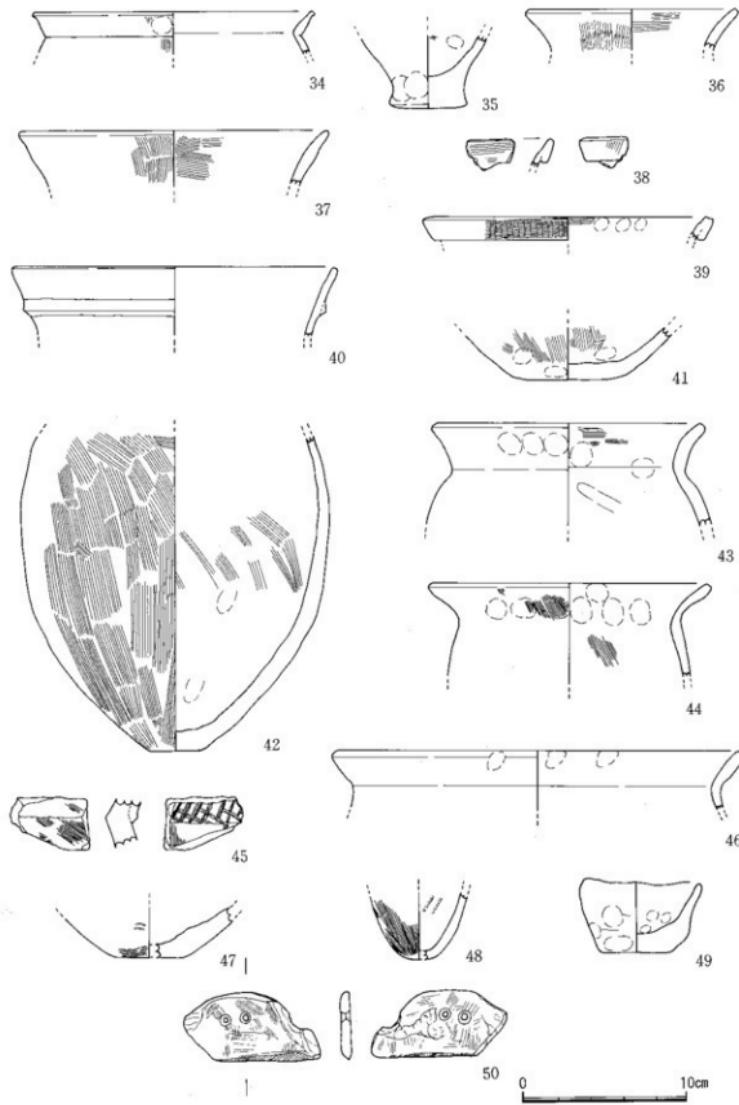


Fig. 10 1区C堅穴住居状遺構及び2区SX 1出土遺物

4 2区の遺構と遺物

(1) SX1

2区の東端に位置する遺構である。遺構の南半は攪乱によりほとんど検出できず、西側はわずかに残るのみである。楕円形が攪乱により切り取られたような形状を示し、その西側部分に接して、最大幅80cmほどの段を有する。段部の検出面からの深さは、5~10cmと非常に浅い。段部から落ち込んだ床面部分はほぼ平坦であり、中央付近の深さは40cm内外である。床面に焼土等は確認できず、火を使用した痕跡は認められない。また、柱穴も確認できない。埋土からは、上層を除き短期間に埋められた様子が見て取れる。なお、埋土中及び床面からの出土遺物は少ない。本遺構については、平面プランでは竪穴住居址状であるが、その他の状況から、自然地形による落ち込みの可能性が強いと判断される。

遺物は、42~50を図示した。42は甕である。小さめのしっかりした平底底部から内湾して立ち上がる。外面は綫及び右下がりのハケ調整を施す。炭化物が付着している。内面も、綫及び右下がりのハケ調整を施し一部は指ナデである。内面胴部下半にも炭化物が付着している。43・44・46は甕の口縁部である。43は、口縁部「く」の字状に外反し口唇部は外傾する面をなす。内外面とも指頭圧痕を有する。44は、口縁部「く」の字状にやや強く外反し、口唇部は外傾する面をなす。外面口縁部右下がりの細かいハケ調整、胴部はハケの後ナデである。内面は口縁部指によるナデ・オサエ、胴部は右下がりの細かいハケ調整を施す。46も外反する口縁部を有し、口唇部は外傾する面をなす。内外面ともハケ調整後ナデである。甕の口縁部は、3点とも頭部は稜をなさない。45の口縁部は上半欠損しているが、外反している。頭部に、格子状刻み目をハケ状工具でつけた粘土帯を貼りつけている。文様は、左下がりの刻み目を施した後右下がりをついている。粘土帯は厚い。

47の底部は、平底から斜上外方に立ち上がる。外面タタキ調整後ナデ調整。内面剥離多いが、指で押さえているようである。48は、丸底風底部から内湾気味に立ち上がる。外面綫ハケ、内面横位のハケ及びナデ調整を施す。49は、手捏ね土器である。

50は、床面直上から出土した石包丁である。一部欠損しているものの、2穴を両側から穿ち、刃部は丁寧に研磨されている。材質は頁岩である。

(2) 土坑及びピット

① SK1

2区の中央部に東西に設定したバンクの南側東端部に位置する。長軸側約85cm、短軸側約70cm、床面の深さ約30cmの卵形の土坑である。西側には段を有し、北よりにピットがあるが、性格は不明である。完形の手捏ね土器である51が出土している。

② SK2

SK1の南に位置する。直径約75cmの不整円形を呈する。壁は切り立っており、ほぼフラットな床面の東端部にピットがある。南端部にも小ピットが存在する。遺物は52が出土した。片方にひしゃげたような脚付き底部から内湾気味に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。外面右下がりのハケ

調整、上半部に一部黒斑を有する。内面は、縦及び右下がりのハケ調整を施す。内外面とも指頭圧痕を有する。なお、遺構の性格は不明である。

③ SK 3

2区の南半は中央部に位置する。直径約70cmのほぼ円形である。床面は、段状をなし、深い方が約20cm、浅い方が約10cmである。弥生土器片が出土しているが、図示できるものはない。

④ SK 4

SK 3の西側に位置する。長軸約1m、最大幅約50cmの瓢箪形を呈する。床面はフラットで、弥生土器細片が出土しているが、図示できるものはない。性格は不明である。

⑤ SK 5

調査区の南部西寄りに位置する。75cm×65cmの南北に長い楕円形を呈する。床面はほぼフラット。図示できる遺物は1点。53は、外反する口縁端部に断面不整三角形の粘土帯を貼りつける。粘土帯外面には、ハケ状工具で上部は左下がり、下部は右下がりの浅い刻み目を施す。口唇部内面には、段を有す。外面縦ハケ調整。内面、上位は横及び右下がりのハケ調整。中～下位はナデ調整を施す。遺構の性格は不明である。

⑥ SK 6

SK 5の南に位置するほぼ円形の土坑である。直径は約70cmで、床面はわずかに2段になっている。深さは15～20cmである。弥生土器片が出土しているが、図示できるものはない。

⑦ SK 7

SK 6の西に接して位置する。直径約65cmの円形状の土坑である。壁は垂直に近く、深さ約20cmで、床面はフラットである。遺物は1点のみ図示した。54は、外反する口縁部に台形状の口唇部を貼りつけ、刻み目を施す。調整は摩耗のため観察不能である。

⑧ SK 8

調査区南端に位置する。長軸1m、最大幅80cmの不整形の土坑である。東壁は切り立ち西壁は緩やかに床面に達する。弥生土器片が出土しているが、図示できるものはない。

⑨ P 1～P 4

ピットは4点図示した。出土遺物は、いずれも弥生土器片が出土しているが、P 2出土の1点のみ図示した。なお、4基とも柱痕は確認できず、性格は不明である。55は、小さな上底風平底底部から内湾気味に立ち上がる。外面摩耗のため調整は観察不能であるが、黒斑を確認できる。内面はハケ調整を施し、底部に指頭圧痕を有する。

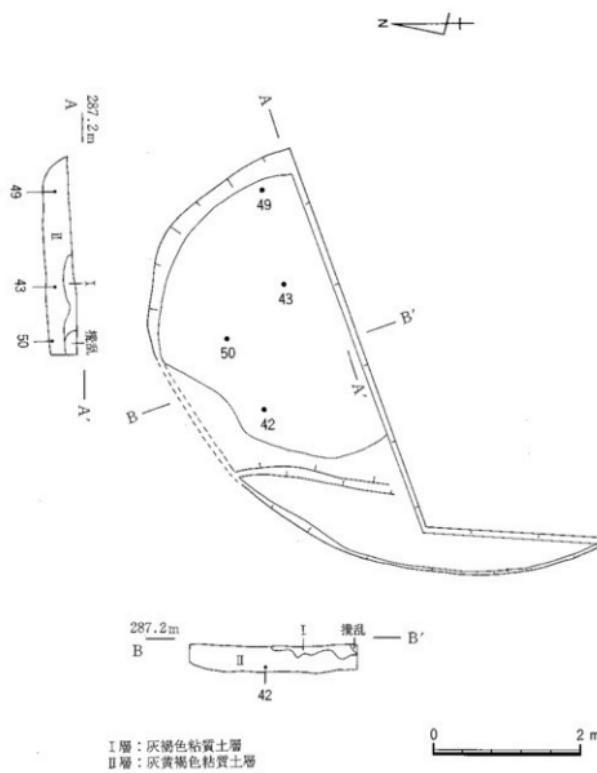


Fig. 11 2区 SX 1

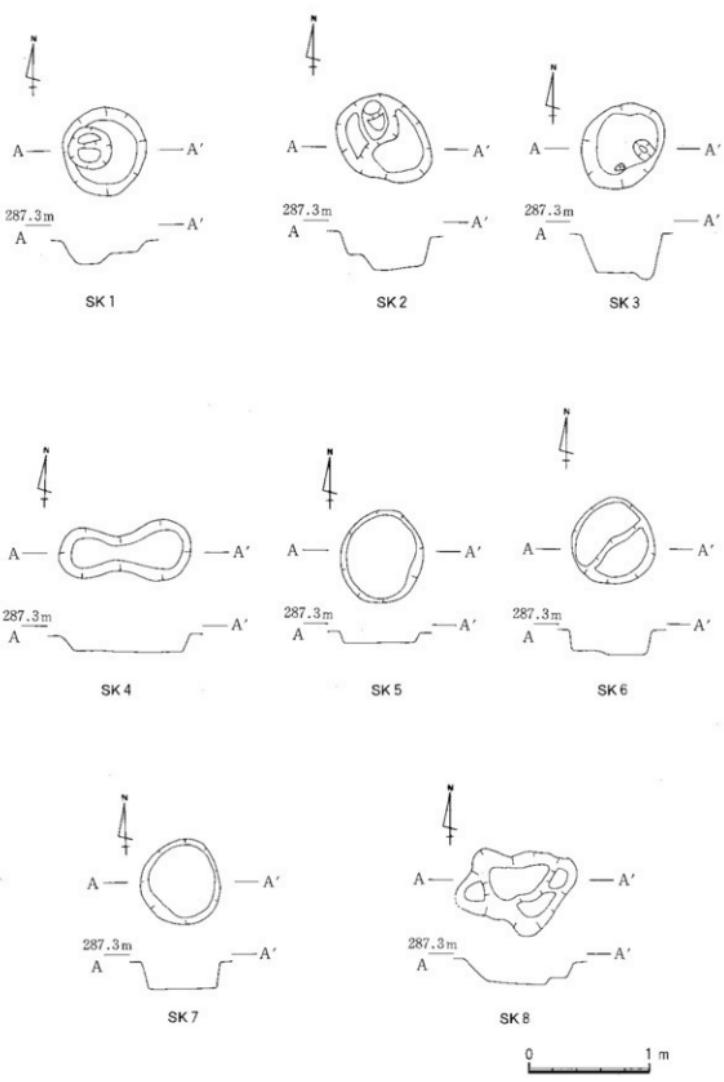


Fig. 12 2区 SK 1 ~ 8

(3) 包含層出土の遺物

56~61は甕である。56は、口縁部「く」の字状に外反し、口唇端部は指でつまみ上げる。頸部外面には、粘土帶の継ぎ目を認め、内面はわずかに稜をなす。内外面ともハケ調整を施す。57は、「く」の字状に強く外反する口縁部を持つと思われる。口唇部は外傾する面をなし、横ハケ調整を施す。内外面とも右下がりのハケ調整。外面には炭化物が付着している。58は、直立する頸部から口縁部ラッパ状に強く外反する。口唇部は外傾する面をなす。外面横及び右下がりの細かいハケ調整、指頭圧痕を有す。頸部には粘土帶の接合痕跡を認める。内面、口縁部横ハケ、胴部右下がりの荒いハケ調整を施す。頸部は稜をなさない。59は、口縁部「く」の字状に外反し口唇部は丸くおさめる。外面タタキ調整を施す。内面、ナデ調整。胴部上位に粘土帶接合痕顯著である。頸部は稜をなさない。60は、口縁部「く」の字状に外反し、口唇部はわずかに面をなす。内外面ともハケ調整を施す。頸部内面は稜をなさない。61は、大型の甕である。口縁部「く」の字状に外反し、口唇部は外傾する面をなす。外面ハケ調整、頸部は内外面とも指頭圧痕が顕著であり、稜はなさない。

62~67は壺の口縁部である。62は、口縁部外反し口唇部は断面三角形を呈す。口唇部上下とも端部は指で押さえている。外面にはヘラ状工具で縱方向の刻み目をついている。外面ハケ調整、内面はナデ調整か。焼成良好である。63は、頸部に横方向の沈線を3本施し、上から米粒大の綫長粘土粒を貼りつけている。胴部上端には、ハケ状工具による縱方向の沈線様文様を施す。硬く焼きしまり、焼成良好である。内外面ともナデ調整か。64は、外反する口縁端部に粘土帶を貼りつけている。口唇部は外傾する面をなす。65は、口縁部ラッパ状に外反し、端部に断面三角形の口唇部を貼りつけている。口唇部外面は、ヘラ状工具で左下がりの刻み目を施す。66は、直立する頸部を持つ壺であろう。口縁端部は緩やかに外反し、口唇部は外傾する面をなす。外面、荒い横ハケ調整を施す。67は、口縁部ラッパ状に外反し口唇部は直立した面をなす。外面、横ハケ調整痕を認める。

68~74は底部である。68は、丸底風底部から内湾気味に立ち上がる。外面摩耗しており観察不能、内面右下がりのハケ調整。69は、押し潰したような平底底部から内湾気味に立ち上がる。内外面とも指頭圧痕を認める。70は、小さな平底底部から斜上外方に立ち上がる。内外面ともハケ調整。71は、小さな平底底部から斜上外方に立ち上がる。外面、わずかではあるがタタキ調整痕を有する。内面はハケ調整。72は、しっかりした平底底部から斜上外方に立ち上がる。外面は摩耗のため観察不能。内面は縦ハケ調整、胴部下端を指でおさえる。73は、しっかりした平底底部から斜上外方へ立ち上がる。調整は、内外面とも摩耗のため観察不能。74は、小さな平底底部から斜上外方に立ち上がる。内外面とも摩耗激しく観察不能。

75は手捏ね土器である。76は、砂岩質の石錘である。全長7.0cm、最大幅4.2cm、最大厚1.2cm重量58gで、長軸側の両端を表裏両面から打ち欠いている。77は砂岩製の凹石である。全長14.4cm、最大幅9.9cm、最大厚3.8cm、重量は78.5gである。片面の中央部に敲打痕を有する。

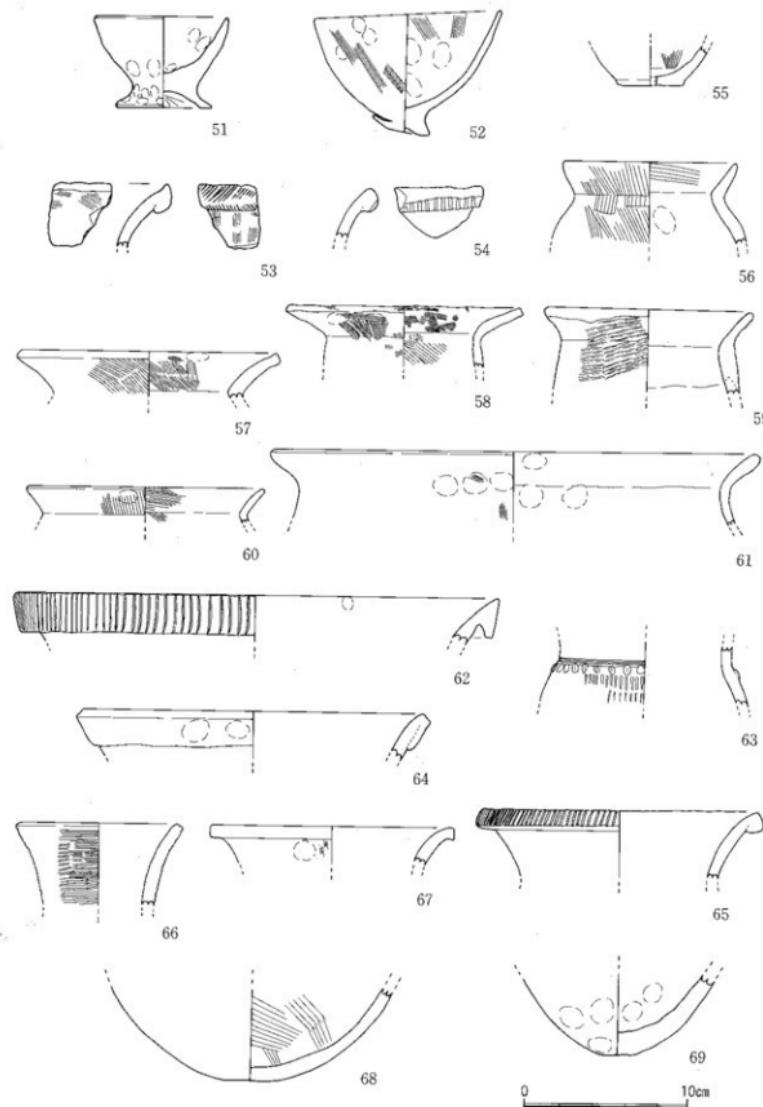


Fig. 13 2区SK 1・2・5・7、P 2及び包含層出土遺物

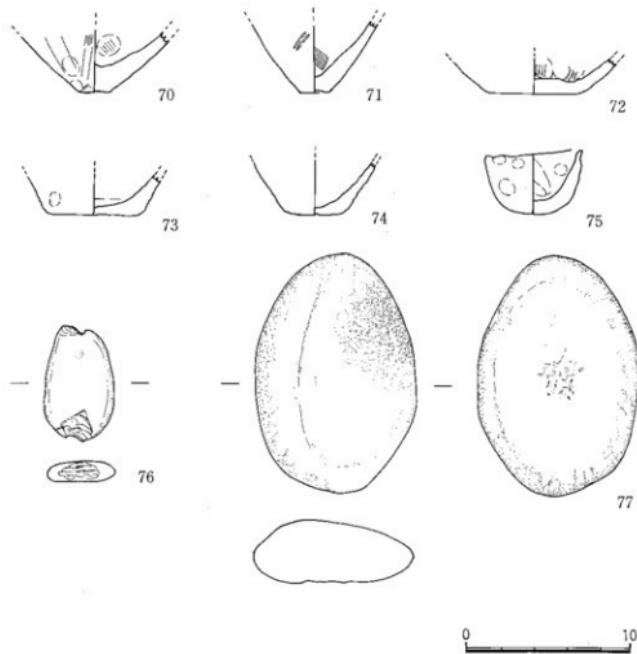
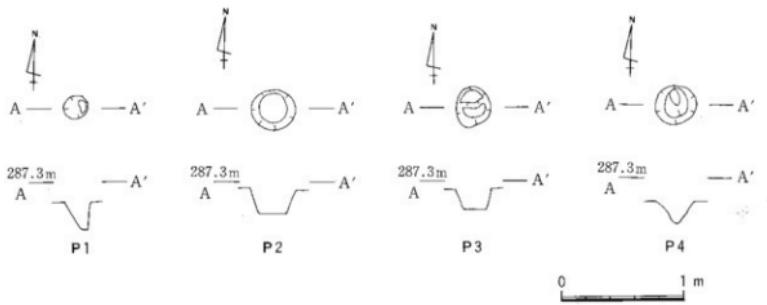


Fig. 14 2区P1~P4、2区包含層出土遺物

第 V 章

平成 7 年度調査

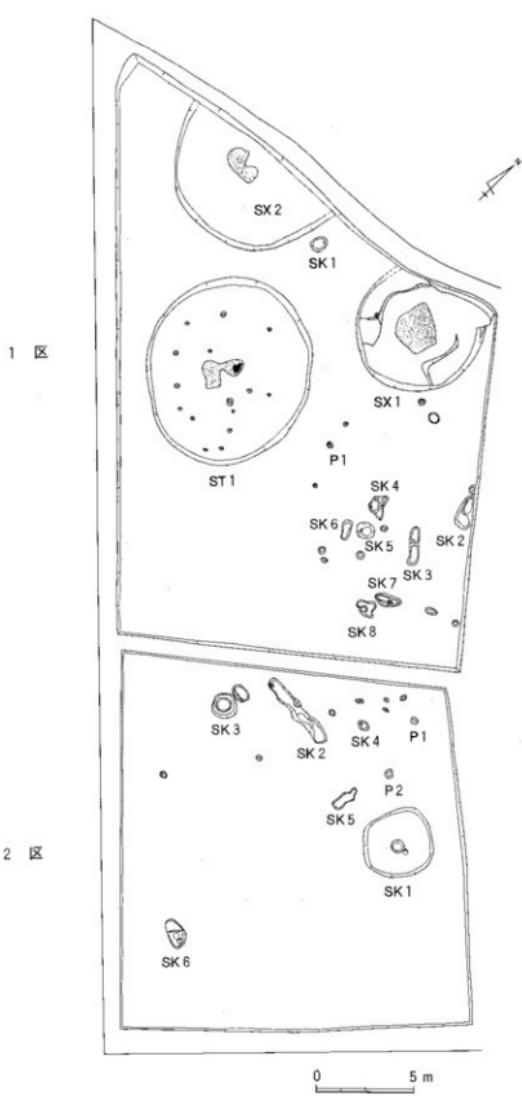


Fig. 15 平成 7 年度検出遺構全体図

1 1区の遺構と遺物

(1) S T 1

1区の中央部やや南寄りに位置する。長径約9.7mのわずかに梢円の平面プランを有する大型の住居址である。床面までの深さは35~40cmである。床面はほぼフラットで柱穴が存在するが、柱穴埋土と床面の土が肉眼では判別が困難であった。そのこともあり、主柱穴は決定が難しい。柱穴の内いくつかには、底に小石を敷き詰めている。中央部には、炭化物の薄い層と焼土が分布しており、炭化した木材も確認できる。その木材の部分が中央ピットと考えられるが、遺構の保護のため、完掘せず埋め戻した。よって、中央ピットの形状等は不明である。

遺物は、遺構埋土及び床面から出土している。78~108を図示した。78~80は甕である。78は、わずかに残る平底底部から内湾して立ち上がる。口縁部「く」の字状に外反し、口唇部は外傾する面をなす。外面、縦及び右下がりのハケ調整を施す。黒斑を有す。内面、口縁部横ハケ、胴部は縦及び右下がりのハケ調整。頭部は稜をなさない。79は、北西の壁際に置いたような状態で出土している。小さめの平底底部から内湾気味に立ち上がる。口縁部「く」の字状に外反し、口唇部はわずかに外傾する面をなす。外面、縦及び右下がりのハケ調整、黒斑及び炭化物の付着を認める。また、胴部中位付近を不整円形に意識的に穿孔している。直径は約5cm程度である。内面、口縁部横ハケ調整。内面にも炭化物の付着を認める。80は、内湾する胴部から口縁部「く」の字状に外反する。口唇部は外傾した面をなす。外面は、口唇部横ハケ調整、口縁部以下縦及び右下がりのハケ調整を施す。口縁部下端に粘土帶の接合痕跡が明瞭に残り、炭化物の付着が激しい。内面は、口縁部横ハケ、胴部右下がりのハケ調整。内面にも炭化物が付着している。

81~87は鉢である。鉢は、完形品に恵まれている。81は、小さな平底底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口唇部は丸くおさめる。外面摩耗しており調整痕は残らない。黒斑を有す。内面は、右下がりのハケ調整痕を認める。82は、上底状の小さな平底底部から内湾して立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。外面摩耗しているがハケ調整痕を認める。内面は指で押さえており、体部下半は下から上へ指でナデている。体部上半に粘土帶接合痕が明瞭に残る。83は、丸底風底部から内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。摩耗激しく外面調整不明、内面はハケ目痕を有す。84は、しっかりした平底底部から内湾気味に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。外面主に縦ハケ、口唇部付近は指で押された後ハケ調整を施す。内面は、ハケ目痕がわずかに残る。内外面とも指頭圧痕多く粗雑な感がある。85は、やや小振りの鉢である。平底底部から内湾気味に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。外面縦ハケ調整、内面横及び右下がりのハケ調整を施す。86は、小さな平底底部から内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。外面右下がりのハケ調整、内面は摩耗している。87は、内湾気味に立ち上がり、口縁部も内湾する。口唇部は丸くおさめる。外面縦ハケ調整を施し炭化物が付着している。内面は不明。

88~91は甕の口縁部である。すべて「く」の字状に外反する口縁部を有し、頭部内面は稜をなさない。88は、直立気味の胴部から口縁部強く外反する。内外面とも、右下がりのハケ調整痕を認める。89は、口唇部外傾する面をなし内外面ともハケ調整を施す。90は口唇部丸くおさめる。調整は摩耗のため不明である。91の口唇部は外傾する面をなし、内外面ともハケ調整痕を有す。外面には

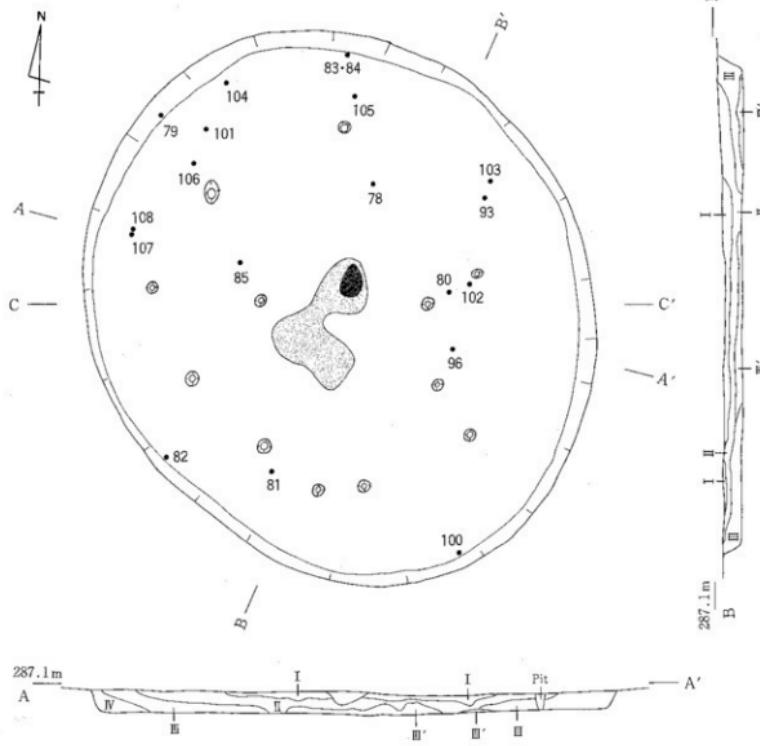
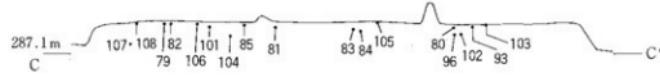
炭化物が付着している。

92～95は壺の口縁部である。92は、わずかに外反する口縁端部に粘土帯を貼りつけ、ヘラ状工具による圧痕文を施す。外面は、2～3条を単位とした荒いハケ状工具で横方向に暗文風に調整している。内面は、調整不明である。93は、長頸壺の口縁部である。直立する頸部から口縁部わずかに外反し、口唇部は丸くおさめる。頸部は、断面楕円形を呈する。内外面とも摩耗激しく調整は確認できない。94は口縁部ラッパ状に外反し、口唇部は外傾した面をなす。調整は、摩耗のため観察不能である。95は、口縁部ラッパ状に強く外反し口唇部は直立した面をなす。外面細かい継ハケ調整を施す。内面は摩耗のため観察できない。

96～99は底部である。96は、丸底風底部から内湾気味に立ち上がる。97は、しっかりした平底底部から上外方に立ち上がる。98もしっかりした平底底部から斜上外方に立ち上がる。外面継ハケ調整、底部にもハケ目痕を認める。内面指で押さえている。99は、上底状底部から内湾気味に立ち上がる。外面調整は摩耗のためはつきりしない。内面は指頭圧痕が顕著である。

100は、平底の手捏ね土器である。101は砂岩製の叩石である。重量は480 gで、全周に敲打痕が残る。102は砂岩製の凹石である。片面には敲打痕が明瞭に残り、一方の面は襍皮面をそのまま残している。103は砂岩製の砥石である。表裏両面とも使用しており、側面にも筋状に使用痕を有す。重量は300 gである。

104～108は鉄鎌である。104は柳葉形鎌で、鎌身長5.3cm、重量9.2 gであり、茎部は欠損している。鎌身は両丸造りとみられる。105は、形態がはつきりしないが、柳葉形鎌の一部と思われる。全長4.5cm、重量14.8 gである。106は三角形鎌で鎌身長4.8cm、重量15.3 gと大型である。鎌身は両丸造りである。107は茎の破片であり、残存長4.8cm、重量6.9 gである。断面は方形をなす。108も茎の破片で、残存長4.5cm、重量5.2 g、断面は方形をなす。



I 层：黄褐色粘质土层
II 层：灰黄褐色粘质土层
III 层：灰黄色粘质土层
III' 层：暗灰黄色粘质土层
IV 层：明灰黄色粘质土层

0 2.5 m

Fig. 16 1区 ST 1

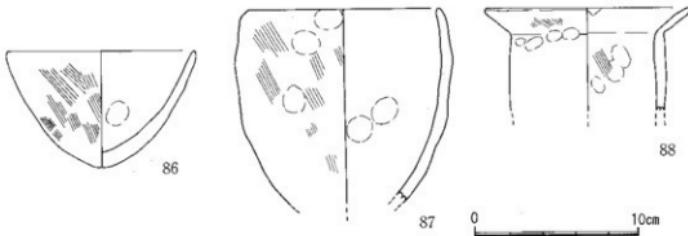
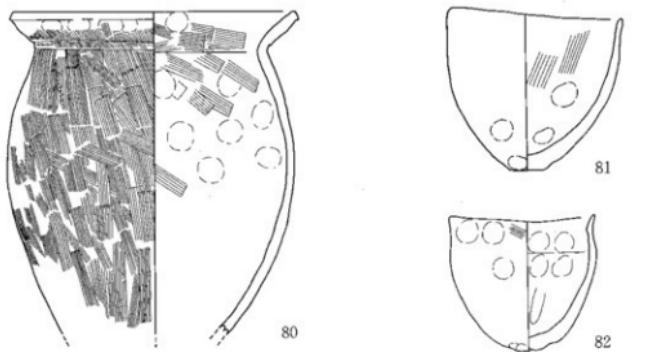
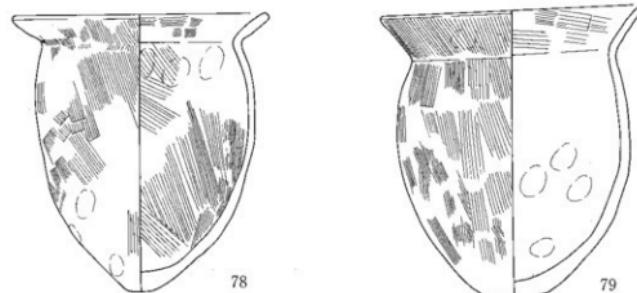


Fig. 17 1区 ST 1出土遺物

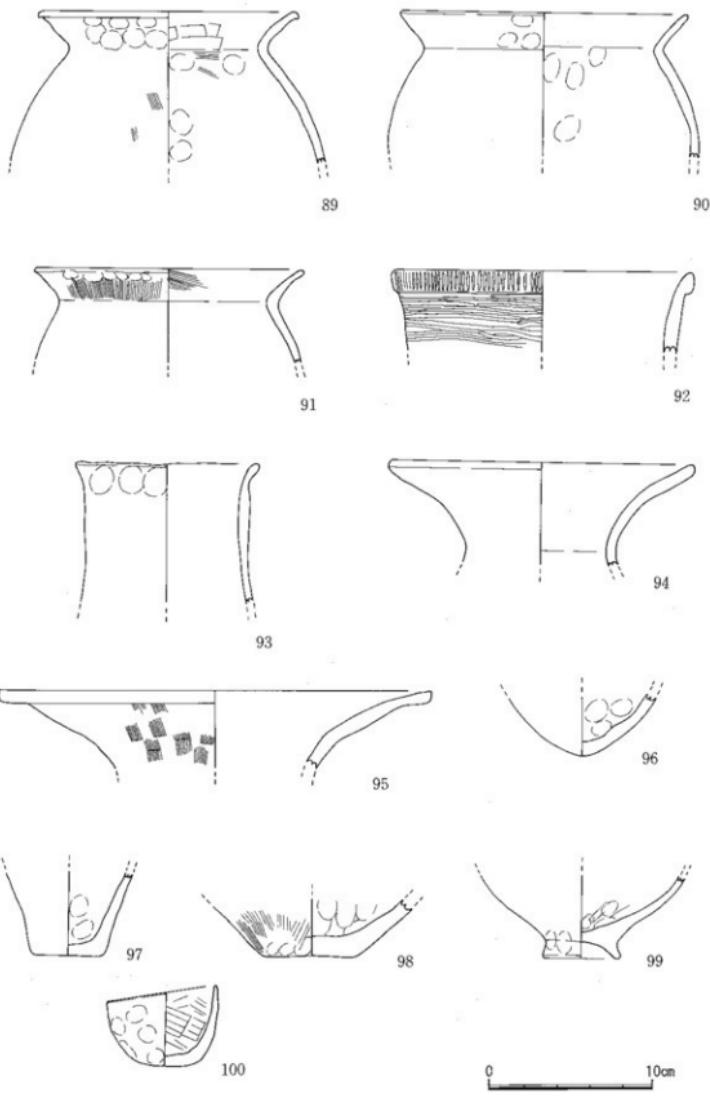


Fig. 18 1区 ST 1 出土遺物

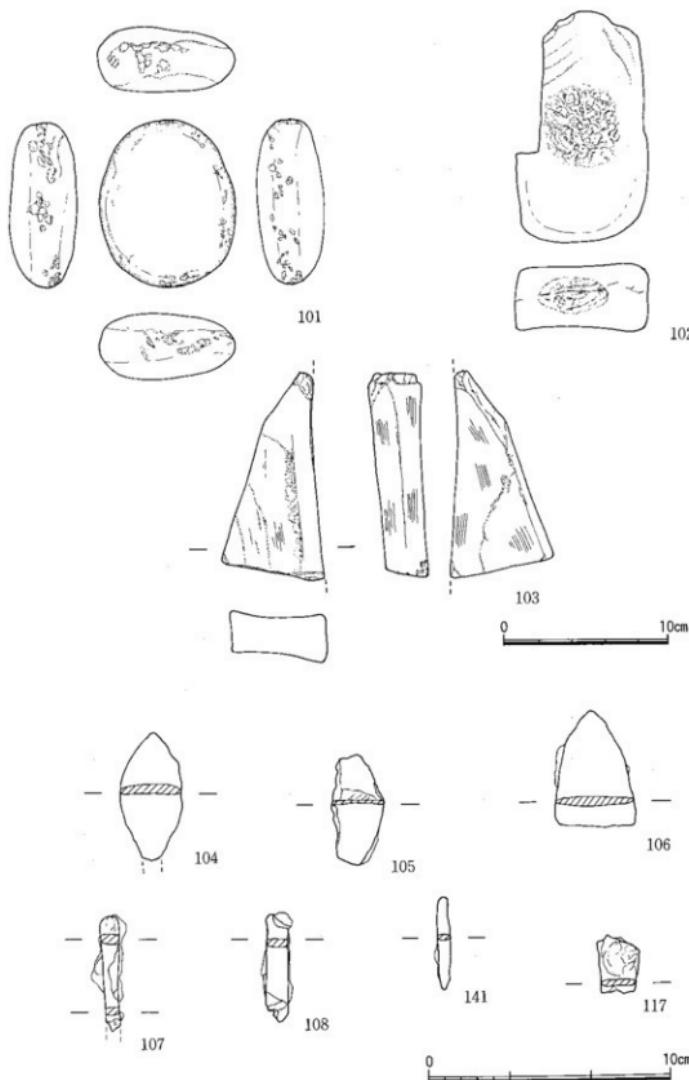


Fig. 19 1区 ST 1出土遺物 (117は1区 SX 1、141は2区 SK 1)

(2) SX 1

1区の北端部に位置し、北側は農道となっているため調査区外であり、全容は明らかでない。平面プランは直径6.5m前後の円形を呈す。西と東の壁際には、あたかもベッド状遺構様に段が存在する。西側は、幅80cm前後で、南に向かってわずかに傾斜しながら途中で一段低くなり床面に至る。上段の南端には直径20cmの円形のピットが存在する。ピット内からは遺物は出土していない。東側は、幅1m前後で北に向かって傾斜し、床面に至る。なお、両側共地山による段で、版築等の工法によるものではない。床面までの深さは50cm内外で、床面はほぼフラットである。中央部には最大幅2.6mを有する不整形の炭化物の分布が認められる。しかし、焼土は肉眼では観察できず、中央ピットについては、その存在を示すものはない。また、床面のその他の部分にも、精査をしたにも関わらずピットは検出できなかった。本遺構については、住居址の可能性が強いものの、断定することには躊躇せざるを得ない。よって、性格不明遺構とする。

遺物については、量は多くない。特に、床面からの出土は微量である。109～117を図示した。109・110は甕である。109は、口縁部「く」の字状に外反し口唇部は外傾する面をなす。外面は、口縁部は指で押さえている。胴部は右下がりのハケ調整を施し、炭化物が付着している。内面は、口縁部横、胴部右下がりのハケ調整。110は、口縁部「く」の字状に滑らかに外反し、口唇部は外傾する面をなす。外面、右下がりのハケ調整、黒斑を有す。内面は、口縁部横ハケ、胴部右下がりのハケ調整を施す。109、110共に頸部内面は滑らかで、稜はなさない。

111は鉢である。わずかに残る平底底部から内湾気味に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。内外面ともハケ調整を施す。112は手捏ね土器である。

113～115は底部である。113は、突出し押し潰したような底部から斜上外方に立ち上がる。外面は摩耗のため調整不明、内面は荒いハケ調整を施す。114は、丸底風の底部を有する。115は、口縁部がわずかに外反する鉢であろう。尖底状底部から内湾して立ち上がる。摩耗しているが、ハケ調整痕を認める。116は砾石である。117は、おそらく鉄錫の破片であろう。形態ははっきりしない。残存長2.4cm、最大幅1.7cm、重量3.1gである。

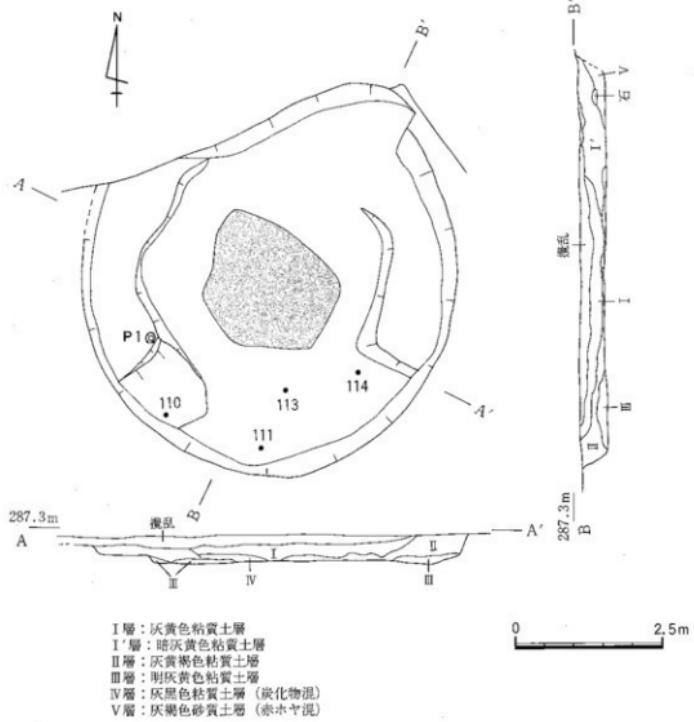


Fig. 20 1区 SX 1

(3) SX 2

SX 1 の西に位置し、北半は農道により調査区外となっている。検出時の平面プランは半月状を呈し、直径にあたる部分は約 9 m である。床面までの深さは 50cm 前後で、床面はフラットな状態となっている。中央部に、長軸方向約 2 m で不整形に炭化物が分布している。焼土は確認できない。また、中央ピット及びその他の柱穴類は、精査をしたが、肉眼では確認できなかった。本遺構についても、住居址の可能性は残るもの、現時点では性格不明とせざるを得ない。

遺物量は少ない。118～122 を図示した。118 は壺である。丸底風底部から内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。外面摩耗している。内面は、ハケ調整後ナデ消している。胴部上位に粘土帯接合痕跡が明瞭に残る。119 は壺である。口縁部はラッパ状に外反する。口唇部は外傾する面をなし、端部はわずかに垂れ下がる。外面は、口縁部右下がりの細かなハケ調整を施す。頸部は、外周に粘土帯を貼りつけ、左下がりの刻み目を施す。使用された工具は不明であるが、ヘラではない。内面は、細かな横ハケ調整。120 は、鉢である。平底状底部から内湾して立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。外面ハケ調整で、黒斑を有する。内面は、ヘラ状工具でナデしている。胎土は精選され、砂粒が少ない。121 の底部には、外面に横方向のタキ調整痕を認める。122 は、尖底状底部から、内湾気味に立ち上がる。外面、右下がりのハケ調整、黒斑を有する。内面は、指で押さえている。

(4) 土坑及びピット

① SK 1

SX 1 と SX 2 の間に位置する、ほぼ円形の平面プランを有する土坑である。直径約 85cm、深さ 20cm 内外で東に向かってやや浅くなる。断面は舟底型を呈す。検出面には、大小 2 個の石が、据え置かれたような状態で並べられていた。2 個とも砂岩で、加工痕は確認できない。また、被熱した様子も見られない。埋土は 2 層であるが、全体に炭化物が多く含まれる。ただし、遺物は検出できなかった。この土坑の性格については、不明と言わざるを得ない。

② SK 2

1 区東端付近では、土坑群が検出された。北東部は調査区外に出ているため、全体の形状は不明である。北西に向かって段をなしながら落ち込んでいる。遺物は弥生土器の細片のみで図示できない。

③ SK 3

長軸方向約 2 m、幅 50cm 前後の長楕円形を呈し南端部は南へ曲がる。壁は切り立ち、平らな床面の中央付近にピット状の落ち込みがある。性格は不明で、弥生土器の細片が出土している。

④ SK 4

大変複雑な形状をした土坑である。断面図の地点では、上下 2 段に分かれる。遺物は弥生土器細

片で、図示できるものはない。

⑤ SK 5

直径約90cmの不整円形を呈す。西側に三日月状の段を有し、平らな床面に至る。壁は切り立ち深さは、60cm前後である。弥生土器の細片が出土しているが、図示できない。

⑥ SK 6

長軸1.1m、幅50cm前後の不整椭円形を呈する。深さ50cm内外で、床面はフラットである。性格は不明、遺物は弥生土器の細片が出土している。

⑦ SK 7

長軸1.1m、最大幅60cmの不整椭円形の土坑である。床面には直径約20cmのピットが存在する。遺物は細片のみで図示できないが、弥生土器である。

⑧ SK 8

最大長1.1mの不整形の土坑である。フラットな床面の南端部に長軸40cmの椭円形のピットを有する。検出面からピット底部までの深さは約50cmである。遺物は、弥生土器の細片のみである。

⑨ P 1

調査区中央付近、S T 1 の東に位置する。長軸約30cm、短軸約20cmの椭円形を呈する。深さ約35cmで、柱痕跡を認める。遺物は、土器細片を確認しているが、時代は特定できない。

(5) 検出面出土の遺物

1点のみ図示した。123は、内湾する脣部から口縁部緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめ、指でナデている。口縁部外面に、暗文風に右下がりのハケを帶状に施す。脣部もハケ調整で、炭化物が付着している。内面もハケ調整、頭部は丸く稜をなさない。

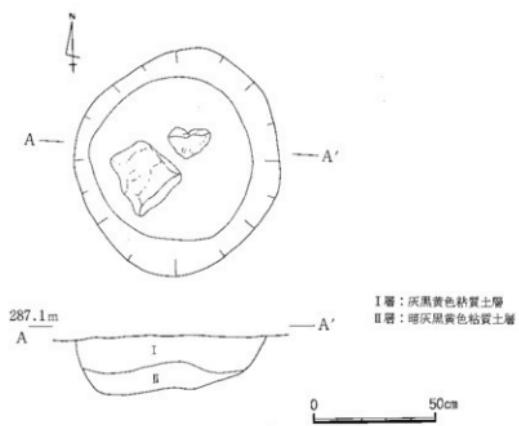
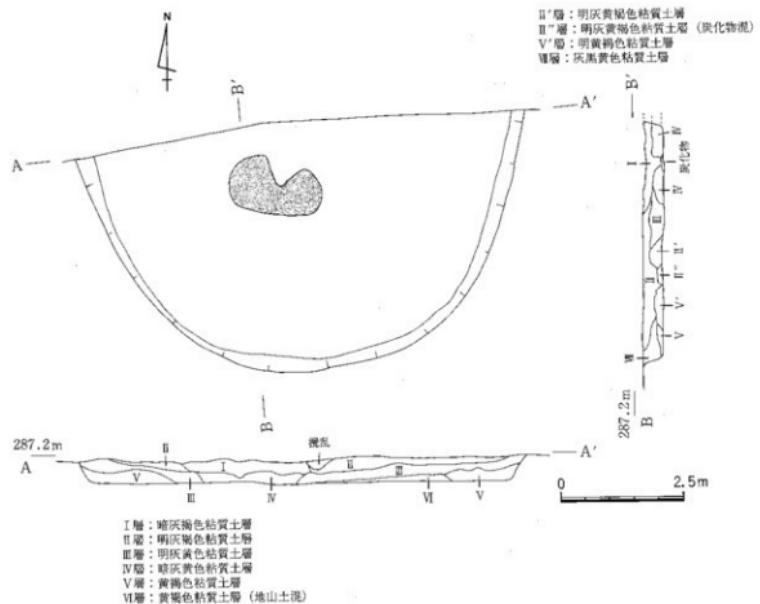


Fig. 21 1区 SX 2、SK 1

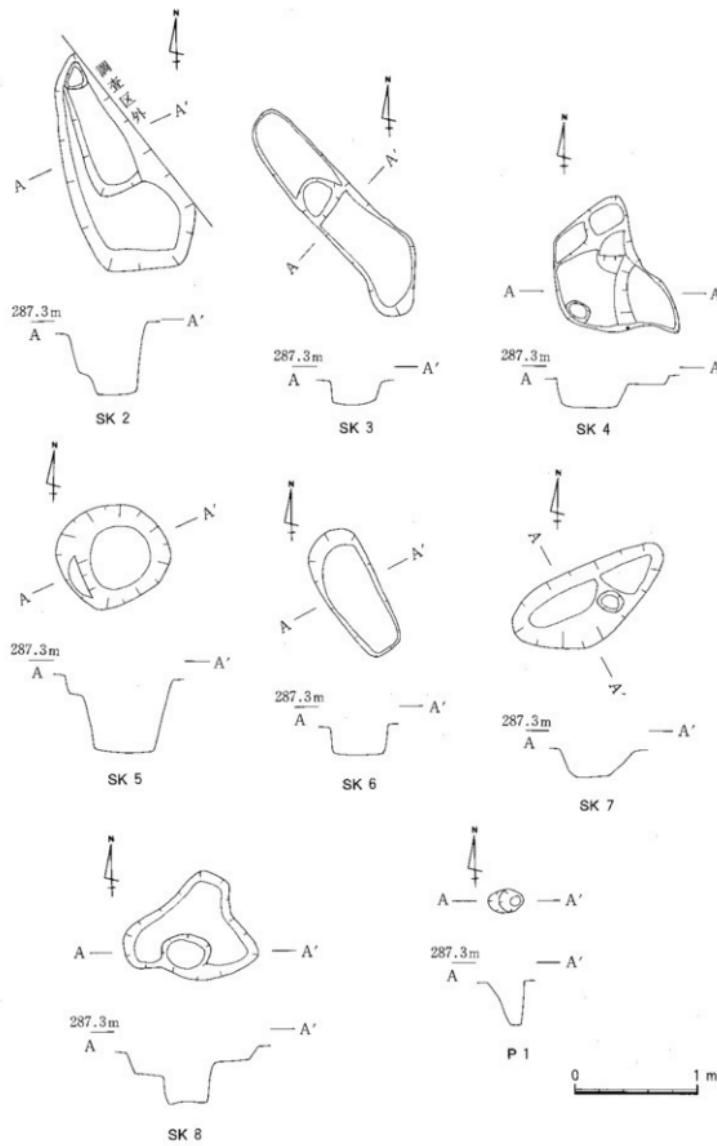


Fig. 22 1区 SK 2~8、P 1

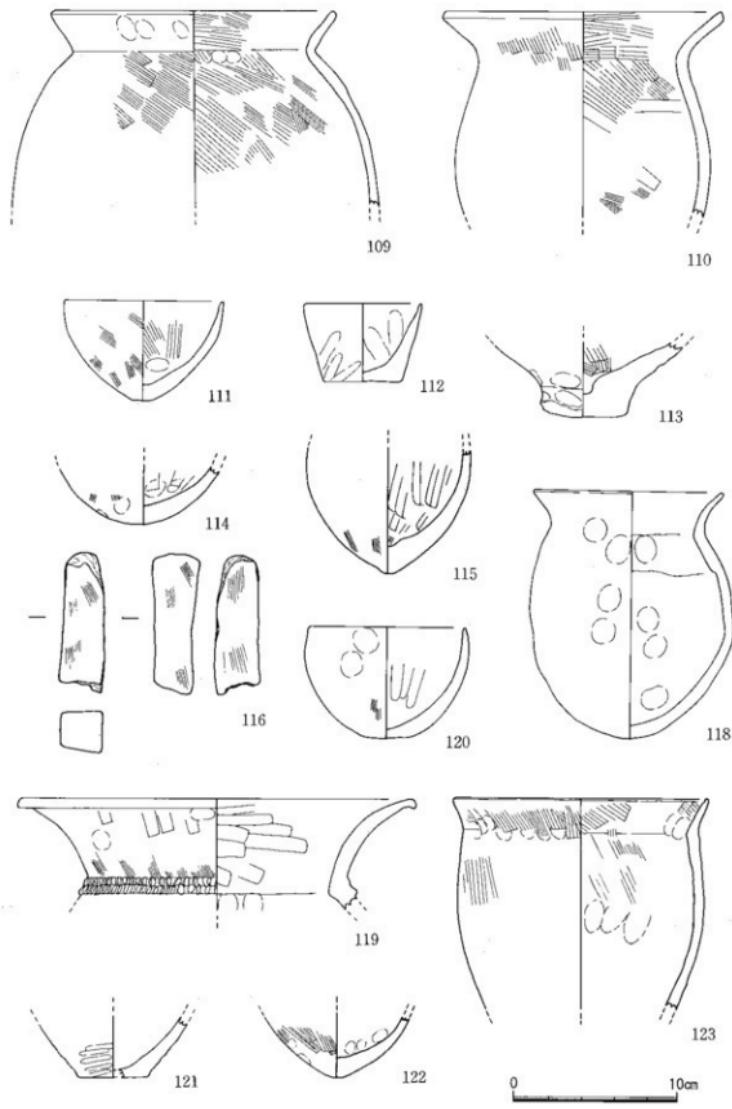


Fig. 23 1区 SX 1・SX 2 及び検出面出土遺物

2 2区の遺構と遺物

(1) 土坑及びピット

① SK 1

調査区の中央北東に位置する、大型の土坑である。平面プランは、直径3.5~3.8mの不整円形を呈す。床面までの深さは35cm内外で、床面はほぼ平らであるが、中央部に直径約60cmのあたかも中央ピット状の土坑を有する。それに接して、長軸35cm、短軸20cm、深さ25cmの楕円形のピットが存在する。床面及び中央部の土坑には火を使用した痕跡は認められない。また、柱穴は確認できない。本遺構の性格については不明である。

遺物は、検出面から上層~中層にかけて集中的に出土しており、下層や床面からの出土は極端に少ない。遺構がある程度埋まってから、まとまって投棄された様相を呈している。また、遺構内の縁辺部には少なく、中央部に集中している。

図示したのは、124~141である。124~132は壺である。壺は、すべて「く」の字状に外反する口縁部を有する。124は、口唇部は丸くおさめ、内外面ともハケ調整を施す。頸部内面は稜をなす。125は、やや小さめの平底底部から内湾して立ち上がり、口唇部は、わずかに面をなす。最大径は胴部上位1/3に有す。調整は内外面ともハケ調整、黒斑有り。頸部はしっかりした稜をなす。126は、小さめの平底底部から内湾して立ち上がる。外面縦ハケ調整、内面もハケ目痕を有する。127は、内湾する胴部を持ち、最大径は胴部中位に有する。口唇部は外傾した面をなす。外面、縦及び右下がりのハケ調整を施す。黒斑有り。内面は、右下がり及び横位のハケ調整、黒斑を有し炭化物も付着している。頸部ははっきりした稜をなす。128は内外面ともハケ調整を施している。頸部内面は滑らかで、稜をなさない。129は、外面縦ハケ調整、内面の口縁部右下がり、胴部は横ハケ、頸部は指頭圧痕が顕著で稜をなさない。130も内外面ともハケ調整痕を有し、口唇部は外傾する面をなす。頸部は滑らかである。131は、内外面ともハケ調整、外面には炭化物が付着している。頸部は稜をなす。132は、口唇部外傾する面をなし、外面は右下がりのハケ調整、炭化物が付着している。内面は、右下がり及び横位のハケ調整を施す。頸部は、はっきりした稜をなす。

133~135は壺である。133は球形の胴部を有するとと思われる。口縁部はラッパ状に外反し、口唇部は丸くおさめる。外面縦ハケ調整を施す。内面は、口縁部横ハケ調整、胴部横位及び右下がりのハケ調整。134は、内湾する胴部から口縁部わずかに外反する。外面摩耗しているがハケ調整痕を認める。内面は、口縁部横ハケ、胴部は指頭圧痕が顕著である。135は、内湾する胴部から外反する口縁部を有する。摩耗のため調整は不明であるが、内面に指頭圧痕を有し、粘土帶接合痕跡を認める。

136は鉢である。体部内湾し、口唇部はわずかに面をなす。ハケ調整痕を有す。137は、やや小さめの平底底部から内湾気味に立ち上がる。内外面ともハケ調整。138は、しっかりした平底底部から斜上外方に立ち上がる。外面に、ハケ目痕を認める。139は石庖丁である。刃部は丁寧に磨かれ、使用痕が明瞭に残る。現状では無孔である。140は砥石である。141は鐵鎌の茎部破片であろう。残存長3.8cm、重量1.3gであり、断面は方形をなす。

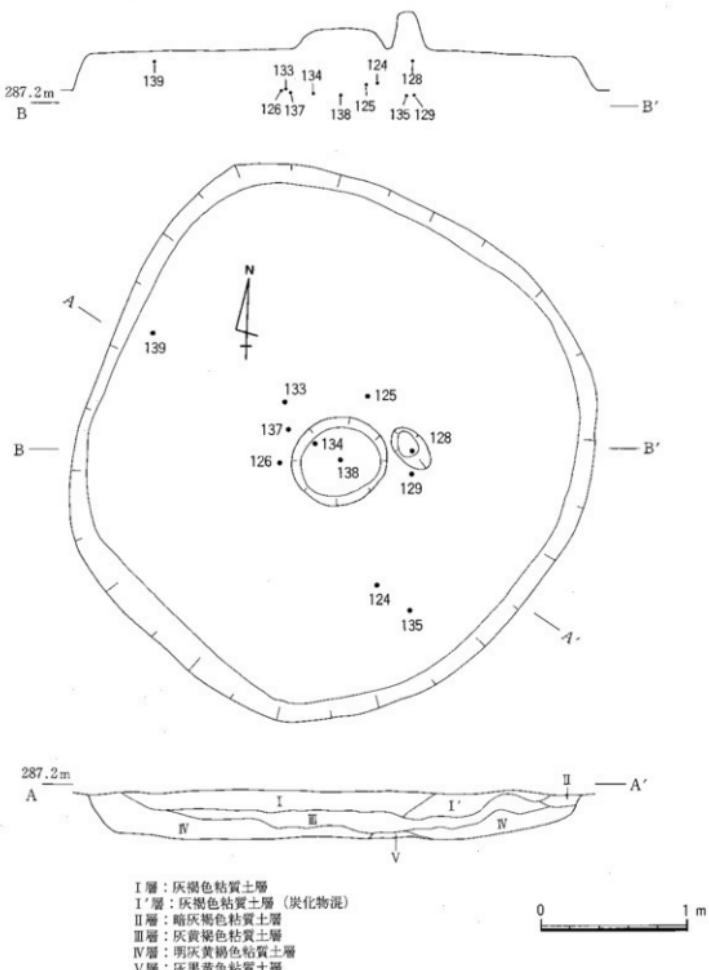


Fig. 24 2区 SK 1

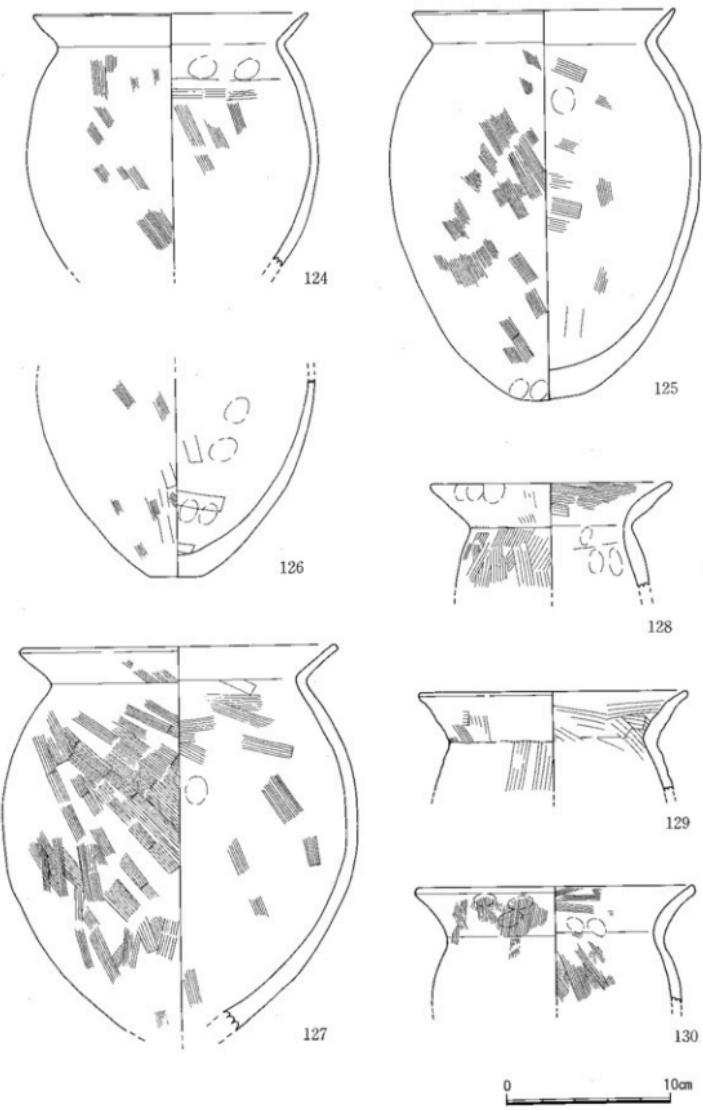
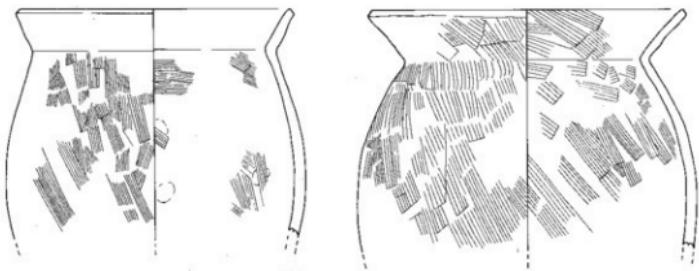
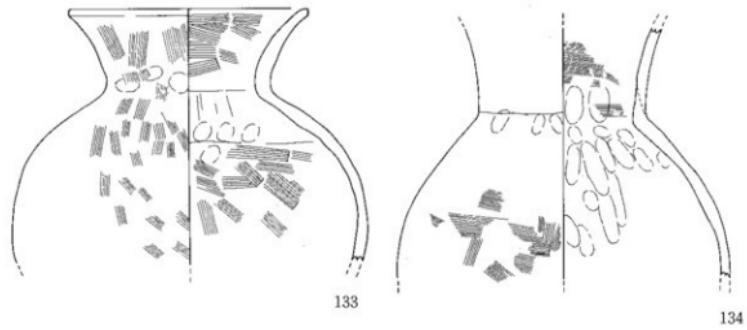


Fig. 25 2区 SK 1 出土遺物



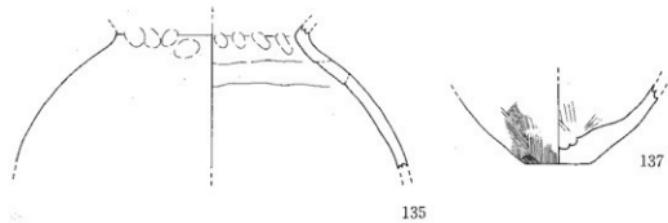
131

132



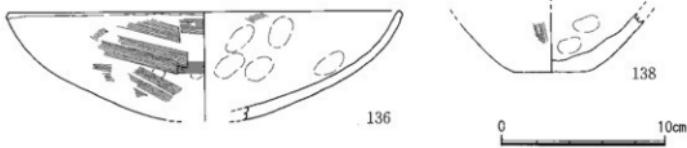
133

134



135

137



136

138

0 10cm

Fig. 26 2区 SK 1出土遺物

② SK 2

調査区の西端に位置する細長い土坑である。長軸方向が約4.2m、短軸が60cm内外、床面までの深さは25cm前後と浅い。北の壁際に30×35cmのピット、南西端にも直径25cmのピットが存在する。

図示できた遺物は2点。142は、完形の鉢である。わずかに突起した尖底風底部から内湾して立ち上がる。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は丸くおさめる。内外面とも摩耗しているが、外面右下がりの細かいハケ調整、内面横位及び右下がりのハケ調整痕を認める。143は壺の口縁部である。肥厚した頸部から口縁部外反し、口唇部は外傾ししっかりした面をなす。口唇部は指でつまんで横にナデている。外面右下がりのハケ調整、内面は、口縁部横ハケ、頸部右下がりのハケ調整を施す。この土坑の性格は不明。

③ SK 3

SK 2の南西に位置する。平面プランは直径約1.3m前後の不整円形を呈す。西の壁は切り立ち東はやや緩やかに下り、第1の床面に至る。その中心部に、同心円状に直径約70cmの落ち込みが存在する。深い方の床面はほぼフラットである。第1の床面までの深さは約20cm、第2の床面までの深さは約45cmである。遺物は弥生土器細片が出土している。

④ SK 4

SK 2の北東に位置する。最大径約60cmの不整円形を呈する。床は2段になり、北西部が深い。最深部までの深さは約25cmである。弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

⑤ SK 5

SK 1の西に位置する、両端が丸い不整形の土坑である。長軸約1.5m、最大幅約60cm、深さは約10cmと浅い。床面は、全体に平である。弥生土器片が出土している。

⑥ SK 6

調査区の南端に、ばつんと存在している。長軸約1.5m、最大幅約90cmの不整梢円形を呈す。床面は西から東に向かって緩やかに傾斜し、中央に浅い落ち込みを持つ。また、東端付近には直径約30cmのピットが存在する。最深部までの深さは約25cmである。遺物は1点図示した。144は甕である。口縁部「く」の字状に緩やかに外反する。口唇部わずかに肥厚し、外傾した面をなす。外面緩ハケ調整を施し、炭化物が付着している。内面の肩部上位には、粘土帶接合痕跡を認める。

⑦ P 1

調査区東端に位置し、最大長約30cmの隅丸逆三角形状を呈す。深さは約20cmで、土器細片が出土しているが、時代は特定できない。

⑧ P 2

SK 1の西にあり、45×40cmの不整梢円形を呈す。出土土器は細片で、時代は不明。

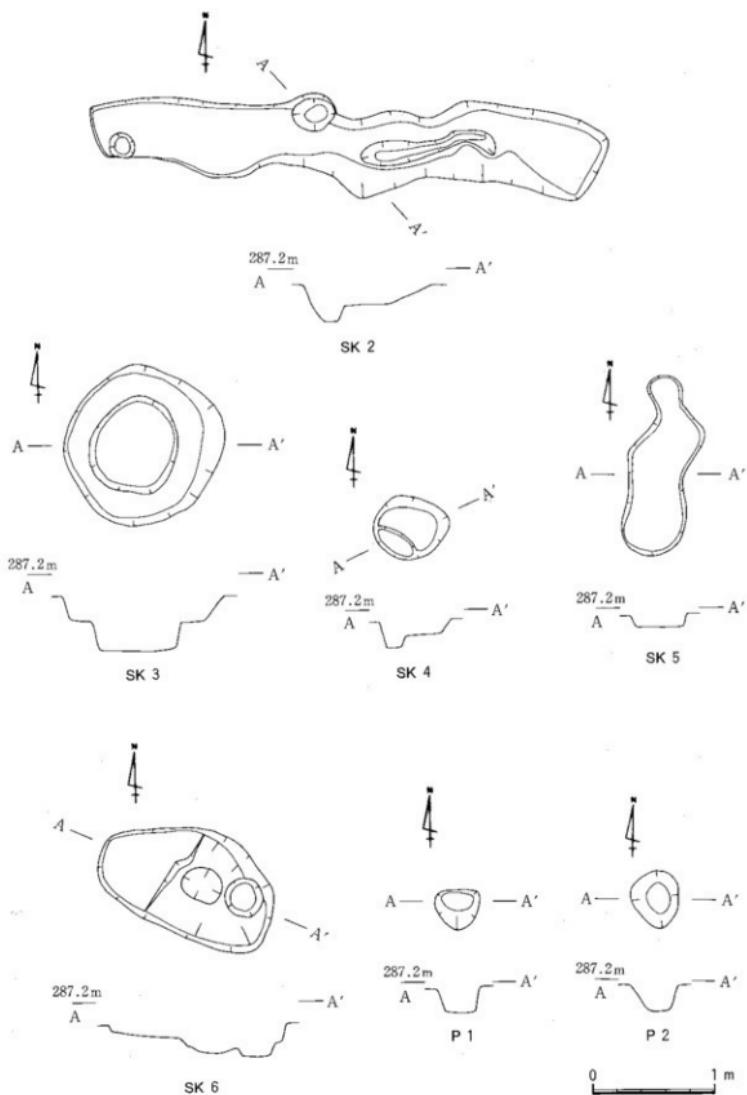


Fig. 27 2区 SK 2~6・P 1・P 2

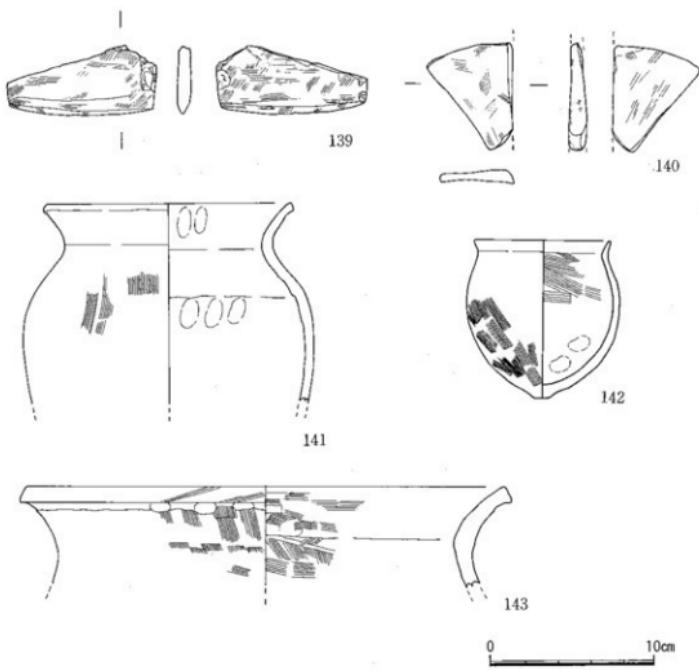


Fig. 28 2区SK 1 · 2 · 6出土遺物

第VI章 まとめ

1 はじめに

本宮野々遺跡は、現在のところ四万十川最上流域の弥生後期～古墳時代初頭の集落遺跡である。四万十川においては、最下流の中村市ではもちろん弥生時代遺跡が確認されているが、その上流においては本遺跡の所在する大野見村に隣接した、窪川町までの間が空白地帯である。窪川町においては、近年、各種は場整備事業に際して精力的に発掘調査が実施されているが、いまだ住居址の発見には至っていない。また、四万十川の源流域のひとつである梼原町においては、田野々遺跡において弥生土器が表記されているが、詳細は不明である。

高知県内の、他の主要河川流域について概観してみると、新庄川においては、中～上流域の葉山村に永野式と呼ばれる標式土器⁽⁴⁾が出土した永野遺跡が存在する。県中央部の仁淀川においては、やはり中～上流域の越知町女川遺跡において、弥生時代前期の可能性がある遺構の検出が報告されている⁽⁵⁾。高知平野では、著名な田村遺跡群を流れる物部川の中流域香北町まで、弥生時代遺跡を辿ることができる。

このように、近年の発掘調査事例の増加により、各河川の中～上流域の河岸段丘上における弥生時代遺跡の状況がおぼろげながら姿をあらわしてきた。これらの遺跡においては、土器の状況等について高知平野中央部の遺跡とは差異を感じられ、その出自等については興味深いものが有る。本宮野々遺跡についても良好な資料となるものであるが、時間的制約もあり、詳細に検討することができなかった。よって、以下のまとめについては、出土土器の特徴等を述べるにとどめる。

2 出土遺物について

ここでは、平成7年度発掘調査において確認されたST1出土の土器を中心に、その特徴等について記述をする。

ST1の土器については、弥生時代後期～古墳時代初頭に属すると考えられる。高知県の弥生後期土器編年については、大区分において3期、さらに各々を細分して7つの小期に区分することが可能である⁽⁶⁾。ただし、これは高知県中央部の高知平野に限定されるものであり⁽⁷⁾、本遺跡についてもその編年観がそのまま適用できるものではない。現に、出土土器の様相は、地域性を感じせるものが多い。しかし、地域性という観点を差し引いても上述の時代に属すると判定するのが妥当であろう。

土器組成は、壺・甕・鉢の3種類であり、高杯については、遺跡全体を通じて確認していない。また、印象として、鉢の割合が多い。これは、高杯の機能を鉢で代用したものなのか、また、本遺跡のみにみられる偶然の産物なのかあるいは地域的特質なのか、類例の増加を待ちたい。

各器種毎にみると、壺については、(1) ラッパ状に強く外反する口縁部を有するもの。(2) 短い頸部から外反する口縁部を有するもの。(3) 長頸壺。等がみられる。成形手法の特徴としては、貼付口縁を指摘しておく。貼付口縁については、高知平野において中期に盛行するが、後期初頭には消滅する⁽⁸⁾。また、近隣の窪川町神西遺跡を標式遺跡とする、南四国独自の土器と言って良い神西式

土器₍₉₎の壺形土器の特徴のひとつが複合口縁であるが、特に平成6年度に出土した土器の中に、その系譜とみられる土器が多く存在する。これらの土器が、流れ込みによる混在なのか、あるいは後期に至るまで地域的特色として、その形態が引き継がれていくのかここではその結論を述べる用意はない。

壺は、口縁部「く」の字状に外反するものがその大部分を占め、(1) 口縁屈曲部内面に稜を有するもの。(2) 屈曲部内面が丸みを帯びて外反するもの。があるが、後者が多い。底部の形態は、(1) 平底。(2) 突出した平底。(3) 丸底風。と様々であるが、平底が多い。また、完全な丸底と呼べるものは殆どみられない。調整については、9割以上がハケ及びナデ技法による。ヘラケズリ技法は1点も認められない。その他、後期前葉以降の調整技法の特徴であるタタキ技法について触れておかなければならぬ。同技法については、高知平野及びその周辺部はもちろん、近年では県の西部でも確認されており₁₀₀、後期一古墳時代初頭の四国西南部に共通した技法であることが明らかになってきたが、本遺跡において同技法が確認できるのは、細片を含めて10点未満である。この地域的特色については発掘調査事例の増加を待って検討したい。

鉢は完形品に恵まれており、(1) 脚台付のもの。(2) 平底で椀状を呈するもの。(3) コップ状のもの。(4) 浅い皿状のもの。等種類が多い。体部は、ハケ及びナデ調整を施している。

その他の遺物として、鉄鎌に注目できる。平成7年度調査S T 1より、確実な柳葉形鎌1点、柳葉形鎌の一部と思われる物1点（複数の柳葉形鎌が重なっている可能性がある）、三角形鎌1点が出土している。このうち特に三角形鎌については大型である。これらの鉄鎌はすべて床面に張りついた状態で検出していることから、流れ込みによるものではなく住居址に伴うものと考えてよい。鉄鎌は、南四国においては弥生時代中期に出現し後期に至り各集落間に普及していく₁₀₀と考えられるが、それが、本遺跡のような山間部の地域にまで及ぶものなのか、なお、鉄鎌以外の遺物・遺構で、集落の緊張状態を推測させるようなものは皆無である。

3 出土遺構について

平成6～7年度を通じて、検出できた住居址は1棟のみであった。その他、住居址の可能性の残る性格不明遺構は数基ある。これらの性格不明遺構に共通しているのは、柱穴が検出できずまた中央ピットが確認できないことである。この条件を満たしてくれたのが、平成7年度のS T 1であった。この住居址は、直径9m以上と大型である。平面プランはほぼ円形で、主柱穴については決定しがたい。中央ピットは、完掘せず保存したため形状は不明であるが、すくなくとも床面の中央より南側ではなく、中央部と言わざるを得ない。高知平野においては、後期後半まで中央ピットが床面中央部に位置しており、時期が新しくなるにつれて南側に片寄る傾向が認められる₁₀₀。また、当該時期になると「隅丸方形」のものが増加するが、これらの傾向には当てはまらない。県西部地域での住居址の発掘調査事例は極端に少なく、今後の成果の蓄積を待って検討せざるを得ない。

註

- (1) 大野見村史編纂委員会 「大野見村史」 S 56
- (2) 岡本健児 「日本の古代遺跡・39高知」 保育社 H 1
- (3) 山崎正明 「北川遺跡」 東津野村教育委員会 1995
- (4) 岡本健児 「中期弥生式土器」「高知県葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書」 葉山村教育委員会 1984
- (5) 曾我貴行 「女川遺跡発掘調査成果概要報告書」 越知町教育委員会 H 8
- (6) 出原恵三 「各地域における弥生時代後期土器の様相 土佐」「弥生後期の瀬戸内」 古代学協会四国支部第10回大会発表資料 1996
- (7) 前掲(6)
- (8) 出原恵三 「南四国における弥生中期土器の展開」「遺跡」 第31号 遺跡刊行会 1988
- (9) 岡本健児 「神西式土器文化の再検討」「高知女子大学紀要 人文・社会科学編」 第20巻 S 47
- (10) 出原恵三・曾我貴行 「西ノ谷遺跡」「中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 I」 第1分冊 高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993
- (11) 松田知彦 「稗地遺跡」 高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993
- (12) 高橋啓明 「ひびのきサウジ遺跡」 土佐山田町教育委員会 1990

平成 6 年度写真図版



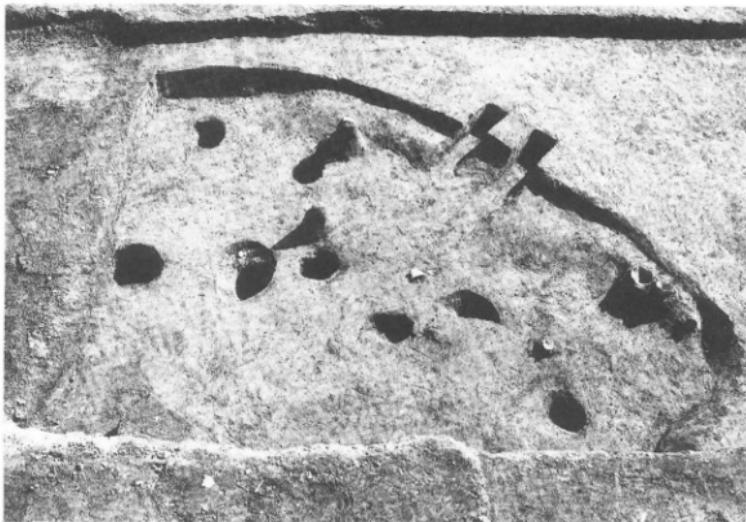


宮野々地区集落

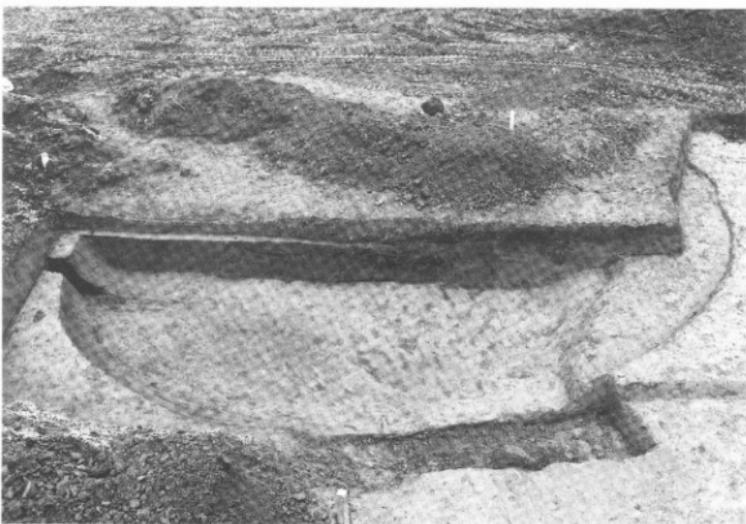


調査前全景

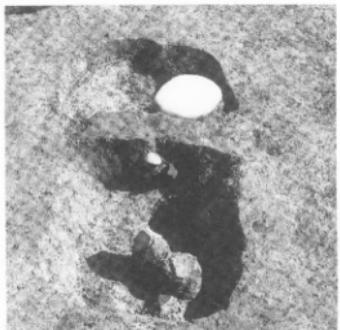
PL 2



1区C竖穴住居址遺構完掘状況



2区S X 1完掘状況



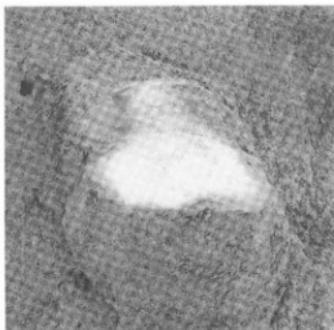
2区SK 4完掘状况



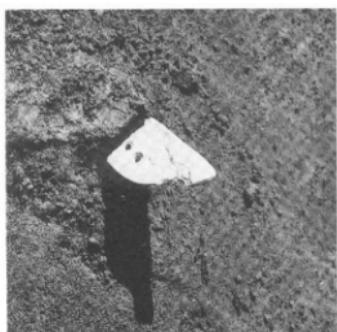
1区C竖穴住居址状遺構遺物出土狀況



2区SK 1遺物出土狀況



2区SX 1遺物出土狀況



2区SX 1遺物出土狀況



包含層遺物出土狀況

PL 4

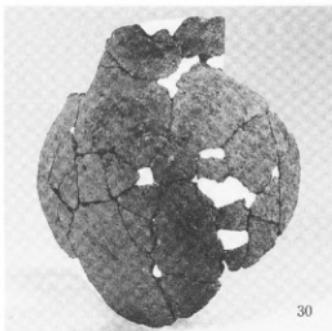
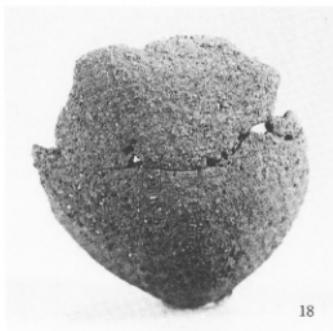
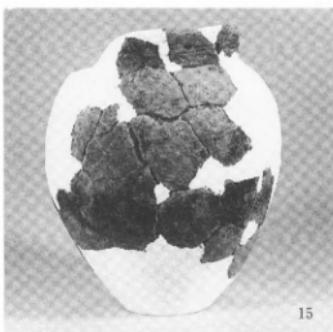
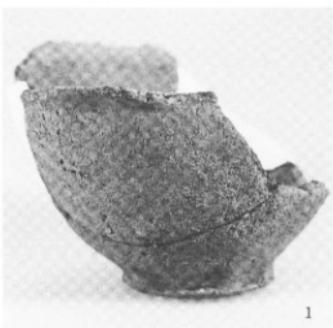


42



51

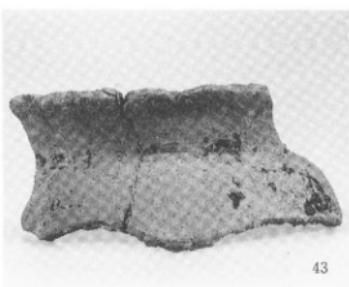
58



PL 6



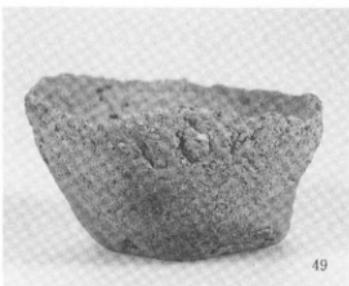
32



43



44



49



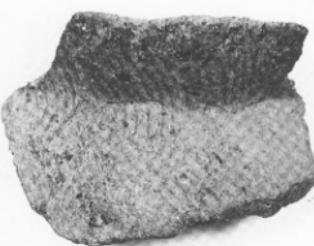
52



53



54



56



57



58

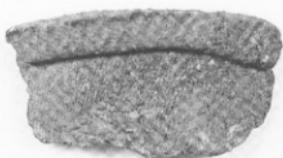


75



76

PL 8



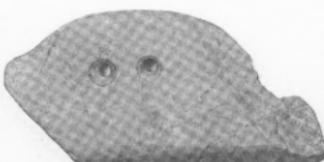
16



31



45



50



62



63



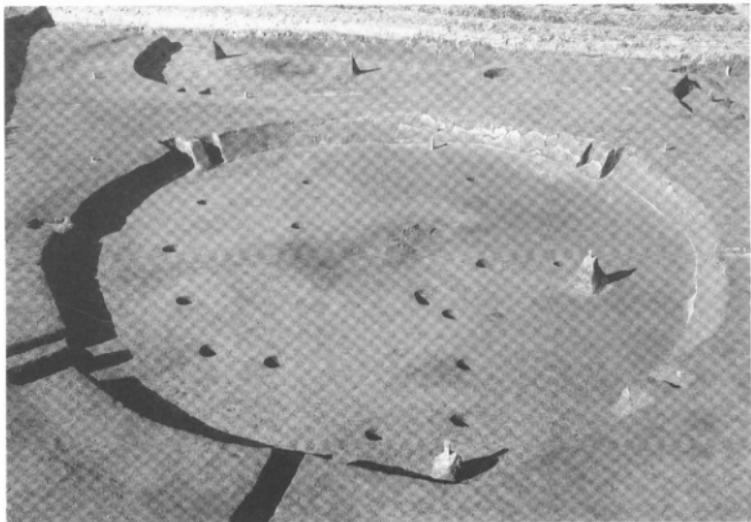
64



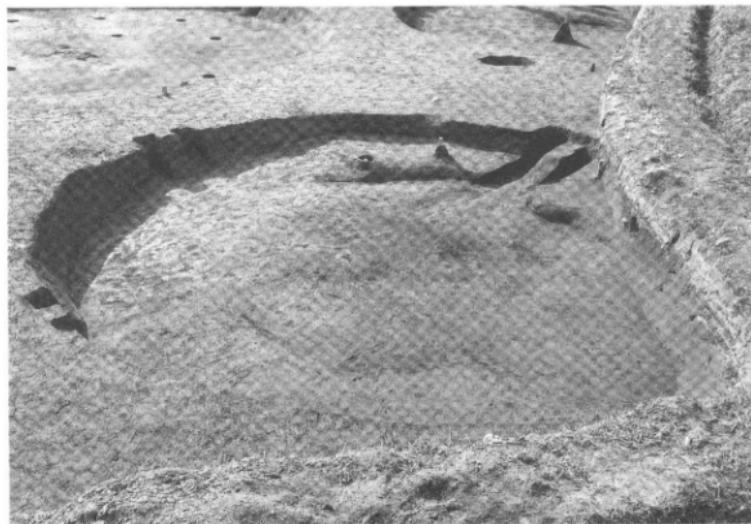
65

平成 7 年度写真図版



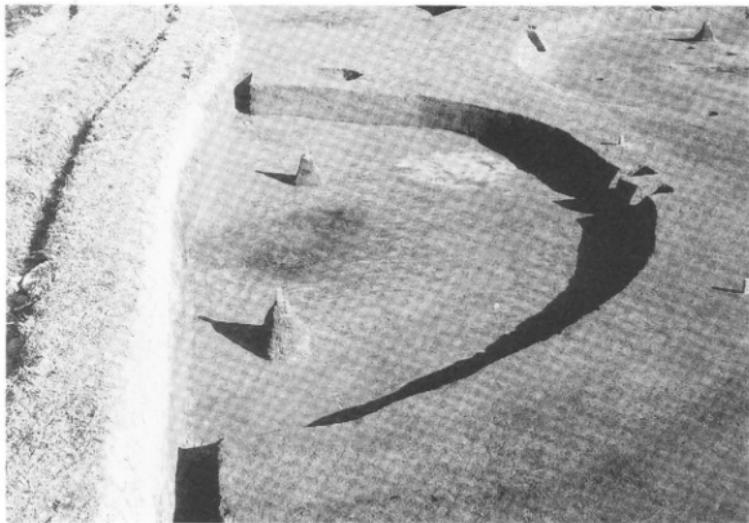


1区 S T 1 完掘状況



1区 S X 1 完掘状況

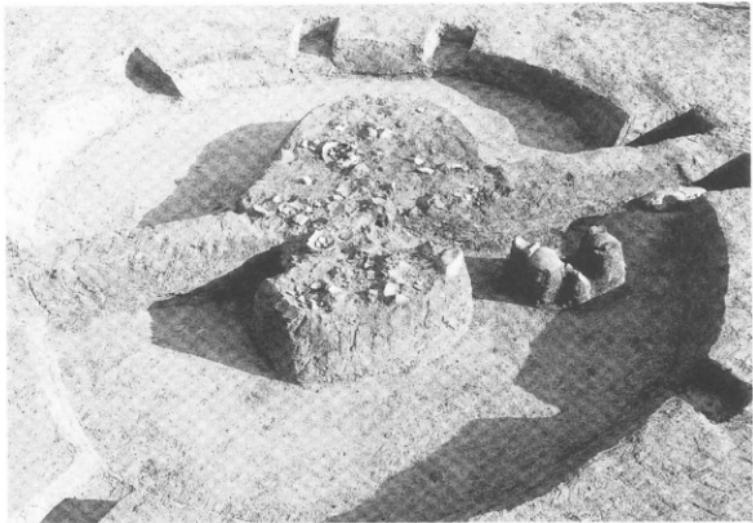
PL 10



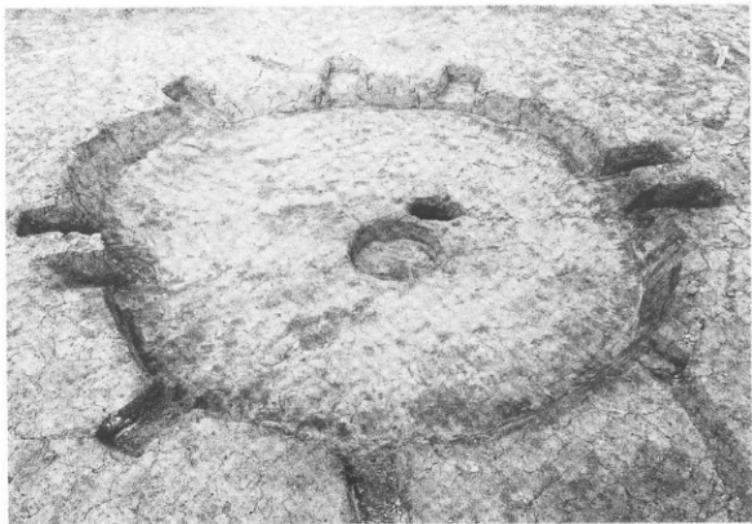
1区 S X 2 完掘状况



1区完掘状况



2区SK1遺物出土状況



同 完掘状況

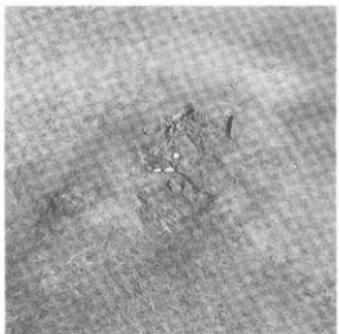
PL 12



2区完掘状況



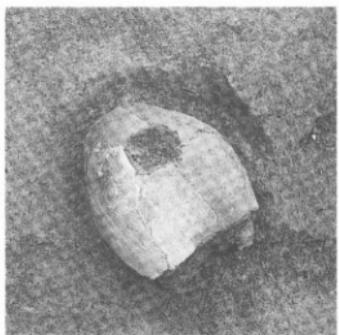
調査地付近の四万十川



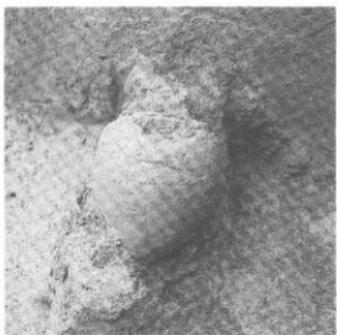
1区 S T 1 中央 Pit 检出状况



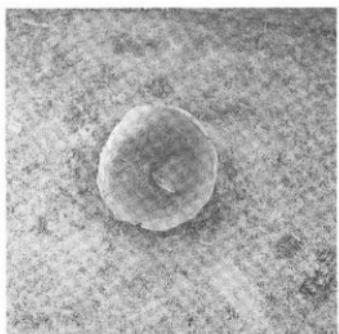
同 遗物出土状况



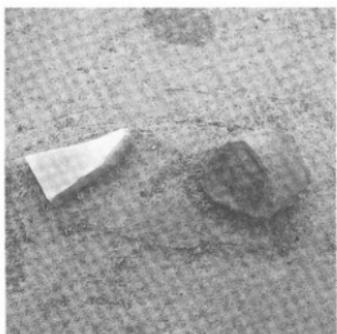
同



同

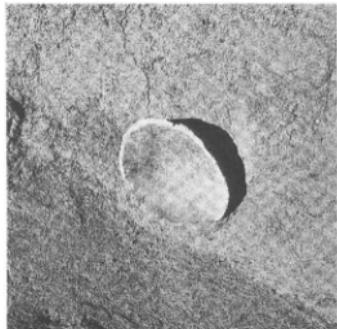


同

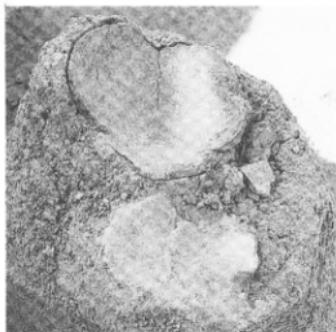


同

PL 14



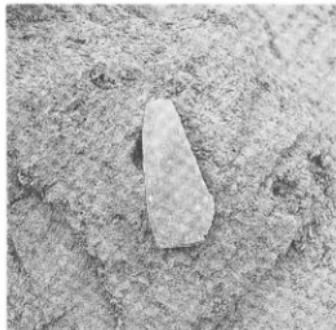
1区ST 1 遺物出土状況



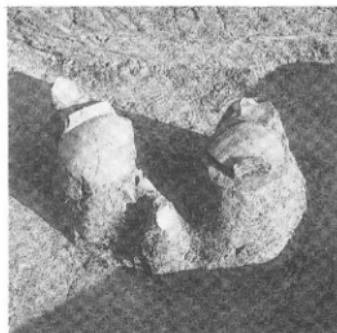
1区ST 1 遺物出土状況



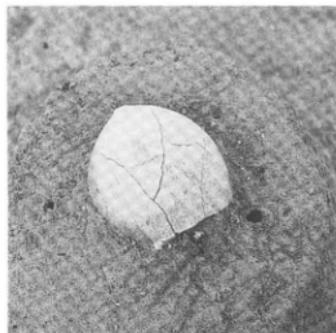
1区ST 1 遺物出土状況



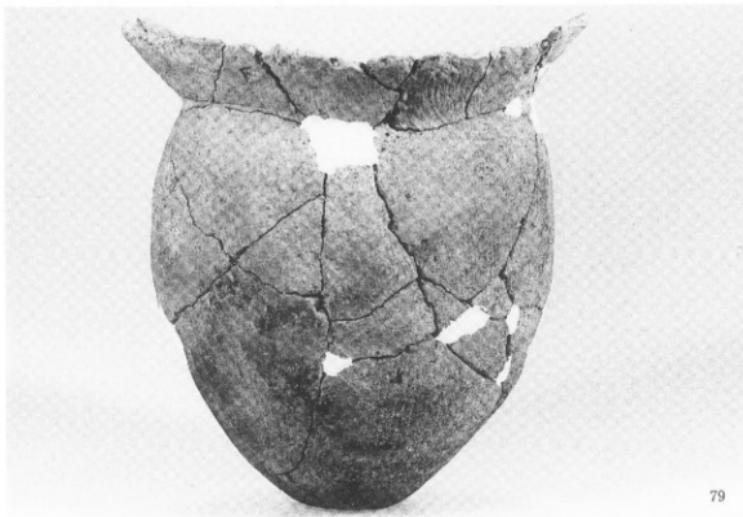
2区SK 1 遺物出土状況



2区SK 1 遺物出土状況



2区SK 2 遺物出土状況



79



80

71